

51324
7

63-150



<p>陸軍教授兼文藝士 文部省参事官 越 嶺 前田 長太譯</p>	<p>品 性 論</p>	<p>帝國教育會長 辻 新次序 佛 國 ジー、ギヘール著</p>
---	----------------------	--------------------------------------

帝國教育會監修

博文館藏版

明治
41 7 15
丙午

序

人は如何なる位地如何なる境遇に在りても健康と
智識と徳操との三者を必要とす而して教育の目的
とする所は此の三者を授くるに在り健康を授くる
ものは體育なり智識を授くるものは智育なり徳操
を授くるものは徳育なり三教育孰れも皆な必要な
りと雖も強き人よりも賢き人賢き人よりも正しき
人と云ふ順序の上より見れば徳育を以て最も必要
なりと謂はざるべからず而して本書は著者の序文
にも言へる如く徳育の書として著はされたるもの

なれば人生最も必要なるものを教ふる書と謂はざるべからず
如何にも品性は人生の至寶なり人は品性に依りて
貴く品性に依りて高し品性は人物の特徴なり人は
公生涯に於ても私生涯に於ても品性ほど必要なる
ものはなし品性の人は家庭に於ても必要なり國家
に於ても必要なり故に品性の人は天下一日も無か
るべからず蓋し人物と品性の人とは異言同義なれ
ばなり教育最高の目的は國家に必要な人物を養
成するに在るが故に結局品性の陶冶に歸するもの

なり本書は題して品性論と云ひ品性の性質必要理
想淵源分類及び修養等を説て至れり盡せり亦以て
品性の人を作らんとを期するもの、如し是を以て
余は此書を見て貴重有益の書なりと思ひ廣く之を
我邦の讀書界にも知らしめんが爲に著者ギベール
氏に之が翻譯の許諾を求め前田長太君に之が翻譯
を囑し帝國教育會より之を徳育の一書として出版
すると、せり今や將に鉛槧に附せられんとするに
臨み聊か本書の價值を記して以て序に代ふと云爾

明治四十一年六月

帝國教育會長 辻 新 次

序

古往今來、世に最も缺くべからざるものは人物である。然るに世に最も缺けて居るものも亦人物である。昔者、大儒デオゲネスが白晝提燈を携へて雅典全市を驅廻つた古事を思出されて、人物拂底の嘆は何れの代に於ても繰返される。

世に人物の缺けて居るのは、之を養成する道に於て缺くる所あるが爲である。

人物養成の道は、品性を具足せしむるに在る。故に智識を開發すると同時に徳性をも涵養しなければならぬ。智に不足なくとも、徳に缺けて居る所あれば、人物とは云はれ

ぬ。
是を以て古來聖賢は智あるのみを以て貴しとせず、徳あるを以て貴しとした。泰西に在りてソクラテスの智行一致説を唱へたる、東洋に在りて孔夫子の徳に重きを置きたる、皆以て見るべきである。而してソ氏の門に品性具足の偉人プラトーンを出し、孔門に顔淵を始め幾多の賢哲を出して、百世の師範となつて居るのを見れば、愈々益々此の眞理の疑ふべからざる明證とすべきである。彼の基督の起りたる、亦茲に於てしたる事は、人の皆能く稔知する所である。

然るに翻つて今日の教育を視るに、往々智育に偏重して

徳育に缺如する所多く、議論徒に美にして、實行之に伴はず其の結果智徳兼備の偉人を出すこと甚稀である。學者を出すけれども、聖人を出さぬ。今日人智の發達、學問の進歩は空前と稱して居るに拘らず、品性の高潔、意力の雄健等の點に於て遠く古人に及ばざるは、亦是れ茲に原由するのである。

西人の樞要徳ウィルツス、ガルチナレスを叫びたる、東人の智仁勇を教へたる、皆品性圓滿の人物を出さんことを務めたるが爲ではあるまいか。

著者ギベール氏茲に見るありて、本書『品性論』を著し、理想の品性として潔直なる良心、強健なる意志、仁愛なる心性、嚴

正なる儀容を説きたるは、亦是れ今の世に品性具足の人物を出さんが爲めである。而して之が修養の道としては、己の人と爲りを知り、人生を律する道を定め、道義的努力を支持するの三大要法を掲げて、品性修養の道に於て殆ど盡して居る。

著者自ら序文に記して曰く『本書は學術書でなく、道德書である』と。如何にも就て之を見るに、其の説く所何れも皆實踐躬行すべき道德にして、空理空論の如きものは一つもない。

世には品性に就て論じたる著書多く之あり。中には好著も尠からざれども、多くは學理的解説に偏して實行に資

すべきもの甚稀である。本書は其の缺陷を補はんとするもの、如く、讀者の智に語らんよりは、寧ろ其の心に語らんとして居るのは、大に吾人の意を得たる所である。

是を以て譯者は智育偏重の今日、此書の極めて有用有益なるを認め、幸にして帝國教育會も亦茲に見るありて、原著者に向つて此書翻譯の許諾を求められ、著者ギベール氏の快諾の下に余に翻譯を囑せられたのである。

但だ譯者元來文辭に嫻はず、特に原著者より翻譯忠實と云ふ條件の下に翻譯の許諾を得た爲めに原書に餘り拘泥し過ぎた結果、譯筆尙更に澁晦を加ふるに至つた、幸に帝國教育會理事文學士牧瀨五一郎君の懇篤なる助力を得て、今

茲に此書を公にするを得たのは深く同君に謝する所である。讀者若し譯文を見ずして、直に原意を解せらるれば幸甚。

明治四十一年六月上浣

譯者 前田長太識

原序

本書は學術書ではなく、道德書である。著者が後者に指を染めたのは、ジュベールの言にもある通り『道德は處世の道を教ふる』からである。

然るに人には處世の道を知るほど必要缺くべからざる事はない。何となれば人は處世の道を實踐躬行すればこそ、人の人たる道を盡すことが出来るのである。

嘗てジュフロアは嘆じて曰ふには『世には人物尠し』と。然れども若も天下の人々が其の傾向の道を辿らずして、斷然決意、律生の方針を定め、規則正しく奮勵努力して、強健なる品性を修養練磨するならば、人物拂底の嘆はないのである。

らう。

理論上では如何なる人でも修養の可能性を具して居る、何となればラコルデルの曰ふには『世には聖人の素と悪人の素を備へざる者は一人もない』と。

然し實際では修養の道を取り、有終の美を收むるまで堅忍持久する者は寥寥、晨星も啻ならずと謂ふべきである。併しながら如何に其人が少数でも、そは關する所でない。矢張是もラコルデルの言であるが『一人でも其人一人にて一大國民と稱すべきである』と。

本書記する所の訓言が唯一人にのみ影響を及ぼしても、若し之をして克己の道を決行せしめ、道心の長き戦争に終

局の勝利を與へ心界に自治自制を爲さしむるまで、堅忍持久せしむるを得ば、著者は其勞の無用に歸せざりしと、本書の世に不生産的ならざりしを思ふて、自ら慰するのである。然しながら實を言へば、著者は收穫の尙一層豊饒多大ならんことを希望して居る。

何となれば著者は知つて居る、今の世にも徳行を憧憬し向上發展の雄志を抱き、モンテーニユの所謂『吾は家具を備へんより寧ろ吾が心性を練磨せんことを欲す』と叫びつゝある者幸に群を成して居ることを。

冀くは此の微々たる一小冊子も、雄健なる品性を修得せんと欲する天下有志の士に貢獻する所あらしめんことを。

著者は本書を草するに當り、自然にして質直なる徑路を
辿りたるが故に、茲に尙ほ詳しく讀者に絮説するの要なし
と信ずる。

著者識

品性論目次

第一章	品性の定義	一
(一)	人物の道德的特徴	三
(二)	人物の道德的組織	七
(三)	人物の道德的精力	一〇
第二章	品性の必要	一四
(一)	良品性	一六
(二)	悪品性	二六
(三)	惡品性	三六
第三章	理想的品性	三九
(一)	潔直なる良心	三九
(二)	強健なる意志	五五

著者は本書を草するに當り、自然にして質直なる徑路を
辿りたるが故に、茲に尙ほ詳しく讀者に絮説するの要なし
と信ずる。

著者識

品性論目次

第一章 品性の定義	一
(一) 人物の道德的特徴	三
(二) 人物の道德的組織	七
(三) 人物の道德的精力	一〇
第二章 品性の必要	一四
(一) 良品性	一六
(二) 惡品性	二六
第三章 理想的品性	三六
(一) 潔直なる良心	三九
(二) 強健なる意志	五五

(三) 仁愛なる心……………七七

第四章 品性の始源……………

(四) 嚴正なる儀容……………八四

(一) 血統の寄與……………九五

(二) 教育の寄與……………一〇一

(三) 意志の寄與……………一一〇

第五章 品性の分類……………

(一) 多血質の品性……………一二七

(二) 神經質の品性……………一三二

(三) 短氣質の品性……………一三八

(三) 冷靜質の品性……………一三三

第六章 品性の修養……………

……………一四〇

(一) 己の人と爲りを知ること……………一四三

(二) 人生を律する規格を定むること……………一四七

(三) 道義的努力を支持すること……………一五一

結論……………一六一

目次終

品性論

第一章 品性の定義

品格とは佛蘭西語にてキャラクターと云ひ、キャラクターの希臘語の「刻む」と云ふ意味の文字より出でたるものである。爾來キャラクターの語は種々様々に使用せられて居るけれども、當初の意味は今猶ほ失はずに始終之を保つて居る。此語を見聞して先づ第一に吾人の記憶に呼起すことは古人が鐫刻の刀を執つて御影石又は青銅の上に偉大なる人物の功業偉勳を刻込み、之を萬古不磨の典型に供した事である。それで此語は時としては永遠不朽の

記念物を示し、時としては鐫刻の器具をも指したのである。又封蠟の上に捺印するとき、其の印章をも亦其の封印をも共にキャラクターの文字を以て指示したのである。是に由て之を觀れば、キャラクターの語は人物の發相にも亦人物其者にも共に通じて使用せらるゝことが明らかである。

情ら考ふるに、キャラクターの事たるや天下到る處に問題になつて居る。自然界にも藝術界にも智識界にも亦道德界にも到る處に之が問題のない所はない。然れども余は本篇に於てキャラクターの語を狭義に解説して、之を『人物の道義的性格』の意に限局する積である。通常は此の意味に限つて用ゐられて居るから、誰も異議を挾む者はなからうと思ふ。何せなれば人物の性格に就て語る度毎に、始終其の道德的方面の傾向及其の價値に就て論ずるからである。

此の如く狭き意味に限つても、品性の語は尙他に數種の意味を有つて居る。其中に重要なるものは三種あつて、吾人は交るゝ之を使用することが出來

る。即ち若し吾人が人物を外部より考察すれば、品性とは其の道德的特徴である。若し人物の内部を考察すれば、品性とは其の道德的組織である。若又人物の最も價値ある特性を言顯はさんとするときには、品性とは其の道德的精力である。

(一) 人物の道德的特徴

人性は皆同じではあるけれども、人々相互に如何なる點に於て違つて居るかを見分ける爲には、左程詳しく人々を調べて見る必要はない。人相に於ける相違點も著しいけれども、道德上に於ける相違點は尙一層著明なるものである。斯く人と人との相異つて居る證徴、我と彼と自ら人物を異にして居る道德的特色は、即ち是れ吾人の品性である。

人あり、其の志望高尚、其の本能崇貴にして、廉潔心深く、誠信以て物に接し、忠實以て事を處し、尙其の風采も麗しく、態度も立派であれば、之を稱して美大な

る品性と云ふのである。之に反して志卑しく、望賤しく、利己心のみ深くして良心を缺て居る者があれば、之を稱して陋劣なる品性と云ひ、取るに足らぬ者と視做すのである。

茲に二人あり、一人は義侠心あり、企業心ありて、其の決心甚だ堅く、艱難に接して恐れず、苦痛に逢つて志を失はざる時は、人之を富める品性と稱し、其の成功期して待つべしと信頼すること出来る。他の一人は之に引き換へ、心柔弱にして、毫も企業精神なく、勞苦に疲れ易く、艱難に挫け易く、反對に接し、障害に逢つて直ぐに氣力を落して了ふやうな者であるならば、人之を稱して貧しき品性と云ひ、何等の爲すべき意力もなく、手段もない者と視做すのである。尙又茲に甲乙の二人ありとする、甲は甚だ人好きのする者で、其の舉止何となく愛らしく、親切で、愉快で、温良で、快活で、閑雅でありながら、凡てに高貴の所があり、睦しくして而も凜として犯す可からざる所がある時には、其人の交際は、毫も厄介なところなく、寧ろ一種の樂みである。其時誰でも、彼人は善い品

性の人であると云ふ。乙は之に反して何となく交際難く、其の言語態度凡てが人の意に逆り、陰氣で近づき難く、情なく、決斷に乏しく、臆病で不快活で、如何にも芒刺があつて觸られないと云ふやうな人であるときは、誰でも彼人は悪い品性の人であると云ふのである。

此の道德的徵候は人の外容一切の上に印刻せられて居るもので、態度の高貴なるも、放縱なるも、謙抑なるも、傲岸なるも、畢竟之が爲である。舉動の着實なるも、不定なるも、堅固なるも、懦弱なるも、亦皆之が爲である。此の徵候は顔面の上にも顯はれて居るから、其の一顰一笑によりて中心の志望感情をも讀むことが出来るのである。此の徵候は眉目の上にも見えるから、眸子が活氣を帯びたり又は沈んだり、眼色が透明になつたり又は曇氣を帯びたり、目附が鮮かになつたり又は又はキョロ／＼したりするやうになるのである。言語の簡潔なると冗漫なると、精確なると曖昧なると、奇異なると陋劣なるとも、此の徵候である。文書が意匠の如く完好なるも、亦は不具なるも、或は心情其儘を顯

はして剛健なるも又は軟弱なるも矢張此の徴候であつて、人の一舉一動一語一黙殆ど凡ての云爲行動の上に顯はれて居るものであるから、人間萬事皆人格的特徴を帯びて居ると言つて差支ないものである。

此の外部に顯はれる特徴を重要視しなければならぬと云ふ理由は、此は内心を明に表示する寫眞鏡の如きものであるが爲である。

勿論此の特徴は一見知り難く、究め易からざるもので、餘程複雑し、餘程加減物であるから、之を看破する人は甚妙いには相違ない。大早計に判断し若くは精密なる觀察力を缺いて居る時には多くの人々が茲に誤りて、其の品評に間違を來たすことがあるから、『容貌に依りて人を判断する勿れ』と曰ひし小説家の言は道理の言葉と視做さなければならぬ。

然れども設令其の容貌が多くの人々に取りて讀み得べからざるものとしても、人相は争はれぬもので、外容は實際内心の明鏡であると言つて差支ない。故に現代の某思索家の言に『相貌は心靈の寫生畫なり、心靈は其の宿り且つ

活かしつゝある肉體に絶えず反映す、吾人の心念は之に依りて外に顯はれ出で、而も之を拒むこと能はず、吾人の生命は隱晦なりと雖も到る處に或は榮譽となり或は恥辱となりて吾人に伴ふものなり』と云つてある。遠き古より聖書には天啓の語を載せてある『其の容を見て其の人を知るべし、人の賢愚は顔に顯はる、其の衣冠其の談笑及其の舉動に至るまで其の人と爲りを啓はさざるはなし』と。

されば品性は人物の道德的特徴であると云ふのは極めて道理のある言葉で、此の外形的徴候を通して人の心の奥をも窺ふことの出来るを見れば、愈々益々此言の眞なるを覺ゆるのである。

(二) 人物の道德的組織

切言すれば品性は人物の道德的組織に存すると言はねばならぬ。外見外容は品性を表現して、謂はゞ品性の面影のやうなものであるが、然し品性を包

容するものではない。彫刻が彫刻師の鑿刀に想到せしめ、繪畫が畫工の天才を指示するが如く、外容も亦品性を偲ばしむるものであるが、然しながら品性其物は尙深く人心に根ざして居るものである。品性は外部に顯はるゝ行爲の深甚なる動因である。人物の道德的組織に外ならぬものである。

如何にも人の行爲は常に其の心土より自然に出で来るものである。故に斯の本性にして斯の行爲ありと謂ふべきである。勿論人は潜心熟慮しても其の性癖の中に種子のない決心を起し且つ熟せしむること出来ぬと云ふのではない。何せなれば自由に選擇して種子を蒔くことは何時でも各自の隨意である。但だ其の自由を充分に運用して斯々の行爲を起さんとする人は甚だ稀である。若し夫れ此の如き強き意志を自己の天性の上に執行せんとする機會の如きは天資材能ある人に於ても尙罕に見る所である。故に此の内部の道德的組織こそ吾人の品性と稱する所のものであると思はねばならぬ。

此の道德的組織は人の傾向趨勢によりて成立つもので、此の傾向趨勢は或は之を天性に稟け、或は之を行爲の反復によりて求め得ること出来るが、何れにしても人の道德的精力を驅つて一定の方向に傾注せしむるものである。但し人を善に向はしむるときは之を善傾向と云ひ、人を惡に驅るときは、之を惡傾向と云ふ。

若し人の傾向を認識すること及び人を支配する所の主なる傾向を見分けることが易々たるところであるならば、人の品性を知ることには甚だ易いことであるであらうが、然し人は我れ自身を判斷するときには、種々の謬想に翻弄せらるゝが故に、我れ自らを純潔なる光明の下に照破することは極めて困難である。人を外部から考察する時にも亦甚だ誤り易い。何となれば其の先入を以て人を視自家固有の志向を人に被せて了ふの嫌がある。加之、人の傾向ほど複雑して且つ動搖し易きものはない。多種多様にして往々は自家撞着し宛も深林に萬木横生と云ふ光景である。境遇によりて變り、時代によりて

渝り、一日の内にも人の機關の状態により變幻定りなく、中々容易に之を解析することは出来ぬ。

此の如く幾多の傾向が複雑し衝突しつゝある裡に、或者は或者を制御して遂に其の心性を占領して了ふ。此の優勢を占めた傾向も亦幾多の變遷を経又反對力の權内に歸して了ふことがあらうけれども、尙其中の或者は常に踏み留まりて勝を制することがある。斯くも幾多の勢力が人を彼方に引張り此方に引張る結果は人の一生に其の特性を表はす方向を定めるのである。述べて爰に臻れば品性につき斯くの如き定義を下さなければならぬやうになる。即ち人の一生を奪ひ合つて居る幾多傾向より成れる恒在的結果是れである。隨て惡傾向を斥け善傾向をして優勢を占めしむるのが即ち是れ品性修養の根基である。

(三) 人物の道德的精力

優勢なる傾向の價值如何に依つて、品性の價值も定まるものである。何せなれば人に其の一生の道を開くものは實に彼の傾向である。是故に人は最も高崇なる傾向(所謂向上心)の權内に其心を置くやうに注意しなければならぬ。

然るに凡ての道德的特性の中で最も品性を高め、最も大なる手段を與へ、又個人的にも社會的にも最も偉大なる効果を人生に提供する所のもは、意志の力であると云ふことは、萬口の皆一致する所である。是を以て普通の言葉の上にも品性と意力とは異言同義の言葉のやうに視做す風がある。其の意味は凡ての品性中最も其名に耻ぢざる所のもは意志の力を以て示さるゝと云ふことである。意志のあると云ふことは、品性のあると云ふ意味で意志のないといふことは、品性がないと云ふ意味である。品性と云ふ語が廣い意義を打棄て、單に道德的精力を示すに限らるゝのも亦以なきことではない。如何にも意志の力なき人を視るに、品性のなき人であることが分る。己の

接觸する所のものに印象を遺すことはない。人にも物にも何等の印刻した跡を止めずして、宛も淡水が金石の上を流れるやうである。銅を刻む鋸刀土を掘る鋤犁に類する所が一つもない。滔々たる人々と同一視されて、人類の爲に寄與貢獻する所更になく、中心軟柔脆弱にして露毛程も氣骨稜々、凜然犯す可からずと云ふ點は見えない。あゝ是れ實に境遇によりて左右せられ、毫も自家固有の形跡を之に印せざる所以である。

之に反して意志のある道德的精力を備ふる人を見るに、誰しも忽ち品性のある感に打たれる。彼は其の接觸する所のものゝ上に其働きを及ぼし、人々にも亦制度にも己が人物の印象を留むるものである。其の言を發するや、直に之を銘刻せらる、是れ確乎たる思想、斷乎たる決心の表顯であるからである。彼は明に其の目的を望見して、勇進邁行し、堅忍持久の精神を以て其道を繼續し、如何なる障礙に逢つても挫折しない、是れ堪忍強く決然たる意志の前には如何なる難關も倒れて了ふと云ふことを明に知つて居るからである。此の

意志の力が即ち品性となるのである。實際では是が人物の全くを表現し盡して居る、是が人物を畫き出して人の前に之を目立たしめるのである。此の人格が甚だ著しくなつて衆人の裡に嶄然頭角を顯はすとき之を稱して品性と云ふのである。

是故にラコルデルの品性の定義は實に肯綮に中つて居る。其言に曰く『品性とは意志の恒久頑強なる力にして、其の志や動かす可からざるものあり。其の自信、自認、友誼、德行等に至りては尙一層動かす可からざるものあり。品性は一種の中心力にして、人格より迸發して、萬人に安心確保を與ふるものなり。……人は知識あり、學問あり、天才あるも、尙且つ品性なきことあり。』斯く觀じ來るときは、品性は知識にも心情にも宿るものではなくして、意志に宿るものなること明々白々である。獨逸の思索家の一言能く之を盡して居る、曰く『品性は十分に發達せる意志に存す』と。

第二章 「人生に於て」品性の必要

ヴォヅナルグの言に『運命に就て嘆く者は多くは自ら嘆く可き者なり』と云つてある。如何にも人は皆各々己の一生の製作者である。外界境遇の吾人に對する影響が如何に強大であるとも、吾等の人生は矢張自家心中より出て來るもので、吾人の感情、吾人の情慾、及吾人の意志等より出るものである。一言以て之を蔽へば吾等の人生は吾等の品性の作業である。

古賢は多年經驗を積み、觀察を重ねた上此事を吾人に教示したのであるが、其言に據れば、人生の相違を解釋決定するものは品性の相違である。才能相等しき者にして、何故或者は成功し、或者は失敗するかは是れ其人の品性如何に依るのである。不良品性の結果として日常小過失あるは、其の人生を毀傷すること一時の大過失に優つて居る。之と同じ道理で、日常の努力も、其の持久性は全く品性に依るものであるが、如何に小努力と雖も、積もれば必ず成功

に導くものである。試に視よ、前途有望の人が失敗失敗又失敗、遂に其の一生を誤るに至るのは何の爲であらうか。恐くは品性に何等かの缺點あるが爲であらう。之に反して天性左程材能ありとも思はれざる人が、羨ましい程富裕幸運の生を送つて居るのは何の爲であるかと云ふに、莫^{ほかでない}他、其の品性が運命を開轉して些の失敗もなく成功の域に進ましめたからである。

若し人生を以て活動せる川流であるとするならば、品性の働は水の流るゝ川床を浚渫するやうなものである。若し人生必ず一の天職を盡さなければならぬとするならば、品性は其の手段を捉まへて之を事業に施行する權勢となるのである。是に由て觀れば品性の如何に依て、有爲の材も空しく一生を誤ることあり、凡庸の人も大事業を企ることあると云はねばならぬ。

隨て品性は人生に偉大なる職責を盡すものである。故に其の必要を深く研究して、人は品性の良否に依て其の得失する所果して如何なるべきかを詳しく考察することが甚だ大切な業である。

(一) 良品性

人若し良品性を具して居つたならば、其の利益する所果して幾許であらうか。

今假りに善良なる品性を具して居る人ありとするならば、余の想像では其人必ず先づ親切で、温良で、且つ人の意に愜ふ所の人である。故意に他人の意を害ふなどのことを断じてせぬ人である。次に堅忍不拔の努力を以て性來の悪癖を矯正し、高崇なる志望を増進せしむる人である。尙又多年心戰の結果、克己の大捷を占め、道德的精力を掌握すること、宛も大將が戰鬪の爲めに訓練したる兵士を操縦するが如くであるに相違ない。何せなれば此等の諸點に適合せざる間は、全く善良なる品性と謂はれないからである。

假りに吾人の品性が此の如きものであるとするならば、其の吾人に提供する所果して何物であらうか。

良品性は人生最も羨望すべき二者を吾人に提供するであらう。幸福と權勢即ち是である。一は心界の歡喜よろこびとなり、他は社會的勢力を及ぼすものである。

吾人は己れ自身の良品性に就て身躬ら第一に幸福しあはせであるに相違ない。吾人が親切なる考、吾が仁愛深き感情が、發して温言となり、禮容となる以前に先づ吾れ自身の心中に無限の喜を感ずるであらう。吾人は自家の心中に於て吾自らを友として樂むであらう。何せなれば歡喜の光と云ふものは先づ第一着に其の迸發する所の我心を照らした後でなければ、我顔面にも反映せず、他人をも返照せざるものである。此の美德は古聖フランソア、ドサルが先づ自ら之を心に呼吸し、而る後己に接し來る人々を便安福樂の大氣の如くに包んだと云ふのを見れば、彼は先づ身自ら最高の程度に之を味つて居つたと謂はなければならぬ。又彼れの心に宿りたる樂しき平安と云ふのも亦此に於て之を認めたのではあるまいか。ジュベールも之を道破して曰つた『快氣温容

は樂しき思想に富みて、前途有望なり。……快活なる氣象は精神を光明にし、之に反し厭嫌の念は之を錯亂せしむ」と。

吾人が我が良品性に就て自ら幸福を感じる譯は世人が我が良品格の返報として微笑を湛へて我を歓迎し、我に向て尙一層温和親切になるからである。人が路に虎狼に逢ひ、其の吞噬を恐るゝのは、手に刃を執つて歩くからである。若し縁の若葉を携へて行かば必ず羔羊に接し、其の平和なる情性を見て樂むことが出来るであらう。然し余は人若し其の品性に於て羔羊の如き温情を示すならば、最早虎狼跡を絶つて強者の權利を振蕩かぬやうになるであらう。と迄は言はぬ、何せなれば永久人に馴致せざる一種の猛獸があるからである。然れども少くとも世人の多数は良品性を備ふる人に向つて同情を表し、極めて無情冷酷なる人でも、他の自負傲慢なる者に向つて振り上ぐる所の武器をば其の人に向つては足下あしもとに投ずるに至るべきや必定である。吾人若し人を傷くることを避けるならば、吾人は常に自ら恕される而已ならず、尙大に人か

ら愛されるであらう、人は誰しも敵を避けんことを欲して居るから、吾人に向つて好んで敵地に立つ者はなかる可き筈である。されば懇情の報せうは歡喜あはれとなつて吾身に返り來るものであるが、それも畢竟品性のお蔭であると云はねばならぬ。故に余は之を缺いて居るのを歎く人に向つてはニコールの言を引て答へやうと思ふ『人の汝を愛せざるは、汝自ら愛せらるゝ道を知らざるが故なり』と。

尙吾人は良品性を具ふるときは吾人の良心の中に安寧秩序の立つを見て亦幸福を感じるであらう。何せなれば若し至上の幸福は心中に平和の觀念を有つことに存すると云ふことを眞なりとすれば、又良心に宿る所のものではないれば、平和でないこと云ふことも亦眞なりとすれば、尙又心界に優勢を占めて居る傾向が善に向ひ、殆ど思慮分別を費さず自然に道德上の義務を行ふやうにならなければ、良心は平和にならぬと云ふことも亦眞なりとすれば、誰か品性は平和と幸福との大原動力であることを看取せぬ者があらうか。吾人

若し十全なる品性を具し、健全なる向上心が優勢を占め、一生の支配權を握つて居るならば吾人は必ず徳行があり、又其の徳行に依りて幸福のあることは瞭かである。吾人若し悪品性を有し不健全なる傾向と臨時の我儘なる衝動とが吾生が荒して居るならば、吾人は必ず操行修らずして、又之が爲に敗徳に陥り悔恨に至ることは必定である。

次に權勢の觀念も亦人生幸福の泉源である。權勢ありと自覺して居る者は恐るゝ所がない。人の惡逆をも恐れなければ、天然の暴威をも恐れぬ。堪忍と決意の堅固なるとに依つて人に打勝つことが出来ると心得て居る。又其の肉體は病苦などを遠るゝこと出来なくても、精神は甘んじて忍ぶことを知つて居るが故に、其の肉身若くは其の財産が蹂躪せられても、從容として楽しんで居ることが出来ると心得て居る。丁度詩聖ホラスの語れる賢人の如く、敗類裡に從容自若として、平穩なる精神を保つて居るであらう。ホラスの詩は左の如くである。

君子一定志。

萬劫遂不移。

雖見美利誘。

雖受暴吏笞。

洵湧亞烈海。

風伯逞暴威。

八百萬神上。

從德電光輝。

假令天柱折。

假令地維虧。

不憂又不懼。

從容我心夷。

此の如く神志悠悠、顔色自若たるは、道德的精力より出て來るもので、吾人の幸福に多大なる貢獻をなすものである。吾心の悲み、苦み、及心配は殆ど皆吾心が憂慮及恐怖心に殘害せらるゝ結果である。思ふに權勢を有すと云ふ觀念は品性問題の一つであつて此の觀念たるや自己の心を全く統御し得て、凡ての手段方法を自由自在に使用し得ると自覺して居る人でなければ抱くことの出來ぬものである。此點に於ても亦『吾人を幸福ならしむるものは、吾人の身分にはあらずして、吾人の品性の性質に由る』と謂はなければならぬ。

又此の幸福は良品性の具有して居る權勢と共に益々増進するものである。何せなれば基督も曰つたことがある『温良なる者は福なり地を獲べければなり』と。世に勝ち天下を征服する天職を有つて居る人には好箇の希望となるものであるから拳々服膺すべき言である。此經驗は又毎日行はれて居る良品性は實に人をも物をも統率する真正なる主君である。

先づ第一に良品性は如何に人心を收攬し之を引付け又之を占領し得るかを究めて見なければならぬ。

抑々人は自然の傾きに因つて温和なる性質の人に附き易いものである。蓋し其人に接するときは刎付けらるゝ憂もなく又角張つた所に衝突する氣遣もなく殆ど自宅の内に居るが如く氣兼ねないと云ふことを心得て居るからである。心を打明けて語り自分の苦しき事情を述べそれで心配の重荷を卸す事が出来ると信頼するからである。又其門を敲きに行つても徒勞でなく必ず親切に取扱はれ何を願つても必ず聽届けらるゝであらうと確信して

居るからである。果して然りとすれば單だ受働的に温良であつても他の人は必ず之に懐^{なつ}て行くこと明である。此の如く人を親切の係蹄にかけるのは一種の懷柔策であつて人心を收攬する第一の法である。若夫れ其の親切が活動的であつて進んで懇篤の温き情を示すならば如何なる征服でも出来ないことはなからう。人を逃げ出させないことですら既に一種の力である況や愛嬌あり堅實なる品性の誘引を以て人を引付けるならば如何なる權勢あるか分らぬ。愛嬌あるときは人心を收攬し人は悦んで其人の勢力範圍内に立つであらう。堅實なるときは人に自分の感情と思想とを吹込んで自家固有の意志の衝動を之に刻付けることが出来るであらう。

世には心浮き意定まらざる人々が澤山あるから此等の人々に取つては明瞭的確なる思想を有ち確立一定の志望を抱く人物は無上の力になるものである。『精神一到何事か成らざらん』『凡ての勢ひ込めたる志望は必ず成就す』と云ふ言のあるのは畢竟五里霧中に彷徨して居る人々でも強健にして

人を制御する力のある人の手によりて氣力を鼓舞され、決然立つて事業に就くに至るからではあるまいか。『我れ志望す』と語り得る程の能才ある人は浮萍の如く動搖して居る人々の意志を引付ける引力の中心點となるものである。蓋し此の如く動搖して居る人々の意志は空中の塵の如く散亂して落付かざるものである。又無能無氣力なるものである。ポナールの言は洵に味ふ可きもので、『言論を以て民を煽動することを得れども、品性に依らざれば之を統御すること能はず』と曰つた。嚴正にして決心が堅く、辛抱の強い人は如何に貧困であつても又如何に低い位地に在つても、異日必ず第一位を占む可き者である。

ラコルデルも茲に見るあつて曰ふには、何事を措いても先づ第一に品性を保つやうに努めなければならぬ何せなれば品性があれば、才能あるよりも尙一層早く又尙一層確に其の目的を貫徹することが出来る。

品性によつて人を支配する如く、境遇をも亦制することが出来ることを考

へて見なければならぬ。

良品性は極めて巧者なもので、決して大早計に事を危くするやうなことをせぬ。逆境に際して黙つて居るのは、弱い爲ではない。無暗な事をして失錯ふやうなことがあつてはならぬと思ひ、故さらに黙して語ることを避け、手を拱して行ふことを差扣へて居るのである。然し是れは好機會を待つて力を蓄へて居るので、機會が到來すれば幸福なる解決は待望者の面前に自然出て來るものである。時運の到來を待つて居る者は、卑怯でさへなければ、必ず世を支配する者になる。彼は力を空しく費して徒勞に歸するやうなことはない。嵐の勢が猖獗にして迎も抵抗すること出来ないと思つた時には、身を屈して待つて居る。然るに暴風と云ふものは始終繼いで居るものではないから、暴風一過して平穩なる日和になるや、忽ち全力を傾注して働くから、必ず己の希望通りに成功することが出来るのである。

時として良品性は人生の戦闘に合格しないと云ふものがあるが、是れは良

品性の語を以て優柔不斷、因循姑息にして無氣無能力の人俗に言ふ、お人好しの意味に解れば、如何にも道理な言葉である。ラブルエールは之に就て斯く曰つた『品性のない品性ほど悪い品性はない』と。然し余の右に述べたのは、決意の堅く辛抱の強い性質を和ぐるに、真心より出る親切の温容と用心深き堪忍の待望とを以てする人を指して良品性と曰つたのである。余の如上指示した品性とは天が世の支配權を施行する者として特に指名した品性を云ふのである。

(二) 悪品性

悪品性に二種ある、氣むづかしい品性と弱い品性即ち是である。二者共に人生には極めて不合格のものであることは言はずして瞭かである。煩悶したり、失敗したりするのは丁度此の品性である。此の如き切言すれば氣むづかしい品性を稱して悪品性と云ふのである。

品性の人は之と交際する者の厄介となり、之に接する人の意を害ふものである。沈勝で、陰氣で、不愉快であるから、愉快を搔消して、打解けた心を縮めて了ふ。冷酷な品評をなし、瑣細な過失をも指摘し、皮肉の言を吐て人を非難するものである。反對に逢へば直ぐに憤り、僅少でも氣に觸ることあれば、赫として怒り出す。常に毒氣のある嘲弄をなし、好んで人の腸を刺るやうな諷刺の矢を放つものである。其の利己心の甚しきことは、殘酷と云はるゝに至るまで壓迫する。温き慰懃の情を示して人の氣に入る道を知らない。傲慢で、剛情で、横柄で、意地が悪くて、亂暴で、復仇が好きで、其の言語舉動の上に怨み深く嫉み深く、怒り易く、誇り易い心を遺憾なく顯すものである。蓋内心に悪が宿つて居るからである。尤も重苦しく荒模様の天にも時々雲切がして晴れる時には、親切なる微笑と無慾な行を爲し得ない譯ではないけれども、然し斯の如き晴天は洵に稀で、又間もなく曇つて了ふから、忽ち氣が沈んで、人を嚇付けるやうな有様になるのである。斯る品性を有つて居る人は二重に禍を重ね

て居ると云つて可い、何となればそれは一種の苦惱であると同時にまた一種の弱質である。

氣むづかしい品性の人は其の周邊の人々に苦しく思はるゝは勿論であるが自分自らは尙其よりも一層苦んで居る。其の身に持った荊棘は必ずしも皆外部に向くと限らない、其の最も鋭い芒刺は内部に向つて、痛く其の感じ易い肉を刺すのである。人は彼に對して仕方のない人と諦めて辛抱して居るが自分は己に對してそれを忍ぶ辛抱がない。あゝ其の交際が如何程厄介なものであるか自ら経験して見るが可い。自分の過を憤つて益々其人物を惡しくしなければ幸と謂はねばならぬ。

氣むづかしい品性の人は良心より此の如く刺激せらるゝが上に尙又人に見捨てらるゝ苦みが重つて来る。人の愛情と云ふ者は心を慰むる強壯劑で幾多の憂苦を癒す解愁物であるが、それが此人に誰も與へるものがない。人は其人を恐れ其人から逃げて了ふ何となれば人は其人を疑ひ、其の非難を恐

れ其の殘酷なる取扱を避けやうと思ふからである。若し人が其人に打向ふやうなことがあるとすれば、それは萬口一致して其の言動を非難し、萬人の手が皆相提携して其人の攻撃を排斥する時に限るのである。此の如く先づ初には孤城落日の姿となり、次に萬人反抗の聲を聞くやうになるのも、畢竟其の罪過の宿命的制裁として之を忍ばねばならぬ。

然らば其の同情に於て失ふ所を勢力に於て得るかと思ふに成程當人は然か思ひ又自分が衆怨の府となつて居つても自ら慰めて居る。彼は元來阿佞者ではない、自分も亦之を高言して誇つて居る。彼は人毎に自分の成した事を誇言するの勇を有つて居る。彼は自分の意見を通す丈の勇氣を有つて居る。氣弱く他人の主張に折れ合ふなどは思ひも寄らぬことである。彼は人から威壓せらるゝやうな人間ではない。自ら人に敬はしむることを知つて居る積である。凡ての地位を自分で占有することが出来ると思つて居る。人を服従せしめて、如何なる事でも意の如くならざるはなしと思ひ、自己の力

は其の不愉快な氣分の中に存すと信じて居る。然し其實彼は大きな謬想の犠牲となつて居るのである。氣むづかしい品性の中には強い者もあれば、弱い者もある。弱い者は不愉快な氣分の爲に決して力を得ることはない、強い者は又之が爲に果斷堅忍の性質を奪はれずして、却て道德的勢力が眞正の成功に達せんとする良道を閉ぢて了ふ。其の最も強い者に至れば、人に不快を感せしめたり、又は自己の境遇を危くしたりして、己の悪品性の爲に漸次衰亡して了ふものである。

人心を收攬するには其心の奥底まで這入り込まねばならぬ。然るに氣むづかしい品性の人は人心を得て居らぬ、人に愛されて居らぬ。故に人の心を攬ることは迎も出来る筈がない。是を以て彼は表面上權勢を占めて、三日天下を保つことは出来ても、人心を收攬することなどは思も寄らぬ事、其の三日天下なるものも漸く暴權を以て僅に支へて行く丈けの話である。人々の脱せんと欲しつゝある羈絆の下に之を壓屈するのは、決して人心を收攬して

居るのではない。

統治者の品性如何に依つて世の形勢が如何に複雑し、又如何に開展するかを注目せざる者はあるまい、臣民は熟練家の治下にありては平穩無事の徳を送つて、各々其堵に安んじて居る者であるけれども、凡庸の君にして、壓制で、不遠慮で、人の氣に入らぬ言をばかり云つて、加ふるに其舉動陰險にして、猜疑心深き人の手に渡さるゝ時は必ず亂れ、分れて、遂には謀反するやうになるものである。悪品性の人は到る處に失敗して了ふ。此人は到る處に其の臣民及配下の者を悪く言つて居るが、實は己が不成功の罪は人に嫁する譯はなく、己れ自ら之が原因であることを曉るべきである。然るに、傲慢の太甚しい爲に己の過失を自認しない、若し一粒の謙徳があつたならば、悪品性を棄却するところが出来たであらうに。

弱い者も亦品性に缺點があるけれども、前者と趣を異にして居る。氣むづかしい人は八釜敷く己の人格を吹立て、矯激な言を吐くけれども、弱い人は

又餘計に己の人格を隠して了つて、一生無用の人間となつて了ふのである。

品性の弱質には數種の階段がある。最低の階段に在る者は精確なる思想なく一定の志望もなく、自分の精神裡に捕捉し難き雲の如く浮て居る所の空想に翻弄せられて居る。一階進めば思想も明快にして志望も確定して居るけれども、其の決心が氣力なき爲若くは人を恐るゝ心で萎靡して居るが爲、何時まで経つても事業經始の緒に就くと云ふことのない人々がある。是等は怠慢怯懦の人々にして徒らに空中の樓閣を畫いて暮して居る者である。尙一階段を進めば、勇氣に富んで管に自ら決斷するばかりでなく、事業にも着手するのであるが、不幸にして活動の元氣を缺いて居るが爲め若くは困難妨害を恐れて居るが爲に勇進邁行して企業を成就するまで繼續することの出来ない人々である。此の如き人々は中途で挫折しなくても往々道を逸失して了ふから、空しく其力を費して折角の企業が皆水の泡に歸して了ふ。

此の如く勇氣を缺いて居る品性の人は始終其の無能無力を惱んで居つて

何を行つても失敗の跡を印する計りである。

感情が鋭敏で、志望の崇高なる人に取りては、自分の力が天職の高きに副はず、薄弱なる意志に裏切せられて、正當の大望を達すること出来ないと思覺する程辛く且苦しき事はない。重大なる事業を託せられながら、之を支へる勇氣を缺いて居るが爲に、自分の手中で如何ともすること出来ないと思ふ程残念な事はない。若し道德的威力を以て管理して行かなければならぬ位置に立つて居る者が、己の柔弱なるが爲に、人々の上に權勢を揮ふことが出来ず、其の爲めに皆其人の監督を脱逸して或は謬想の捕虜となり、或は劣情の奴隸となるやうなことがあつたならば如何であらうか。其人は良心と品位とを有つて居るから之を苦しく感せずには居られないであらう。凡て柔弱なる品性の人には、設令其の心情が左程優美高尚でないとしても、自分が境遇から若くは人の命令的意志から支配せられ、黙々に附せられ、時としては踏付けにされて己の人格を墜して了ふと見るときは必ず苦しい心が起るものである。

故に弱い者は如何に無感覺と云つても始終不幸なる者である。

弱い品性の人の不幸とする所は、活動の元氣を缺如して、大飛躍大發展を試みることの出来ない所より生じて來るのである。彼は波のまにまに漂はされて宛も漿なく楫なき小舟の如き觀がある。勿論其の一たび求め得た速力を失はずには居るが、又それが爲に何か成功する所あるだらうと思つては居るが、然し大飛躍の必要な場合、其の大手腕を發揮すべき場合には、著しい失敗を招いて明に其の無氣無能力なるを顯はすのである。一時元氣が出て來て意力のあるを證明すること出来ないが、此の意力ありと云ふ妄信は永く繼かず、隨て事業に取つて何等の効驗なきが上に、尙又多くは一時激烈に發して來るが故に、畢竟は重大なる利害問題に冷淡無頓着なると同じ損害を招くやうになるのである。

由是觀之、缺點のある品性は氣むづかしくても、亦弱くても之を惱んで居る人に取つては一の不幸である。人の世に處する、斯くまで品性に關するるとす

るならば、誰か人生の責務を放擲して、品性の性質價值及之が修養に就て冷淡無頓着にして居られやうか。

第三章 理想的品性の特徴

前にも述べた如く、品性は人生を作るものである。

故に最善なる品性は最善なる人生を作ると謂はねばならぬ。人は其の生命を希望するものである。之を寶の如く貴んで空しく之を費さぬやうに氣を附くるものである。其の聲價を高め、其の權勢を利せんと欲するものである。是に於てか吾人の心に最高の志望が起る。即ち吾生をして益々高尚ならしめ、益々強勇ならしめ、又益々有効ならしめんとすることである。

然れども此の美大なる志望を起して、最善なる人生に向上するには、須らく先づ品性を修養する義務あることを自覺しなければならぬ。何せなれば品性は人生の尺度にして且之を作る器械である。其故如何と云ふに、品性陋劣にして其の人生の雄大なるものなく、又品性の怯弱にして其の人生の成功す

ることはないものである。

生きて己の品性を修養せんことを心懸けて居る者は、之に着手する前に先づ己の實現すべき理想を明に畫くを以て第一着の事業とするであらう。如何なる品性を具へたならば宜からうか。是れ實に人生の先決問題である。

品性には天然の領分と人爲の領分との二つがある。余は之を後條に於て詳しく説明する積である。

天然の領分に對しては人之を奈何ともすることが出来ぬ。之を天稟に得た者は其儘繼續して行くより外はない。若し鐵石の心を以て生れたならば其の鐵石の心を磨いて行かねばならぬ。若又蒲柳の質に生れたならば、己を蒲柳の質のやうに見做して方法を取つて行くより外に仕方がない。語を換へて之を言へば、血性男兒として生れた者ならば、終身血性男兒として繼いて行くであらうし、神經質に生れた者ならば、一生神經質で終るであらう。餘皆推して知る可きである。然し天賦の素質が如何様であつても、左程失望する

には及ばぬ。田地は如何に荒敗して居ると雖も、上手に耕して收穫豊饒の地となさしめること出来ぬ筈はない。

如何にも品性に於ても人の鋤犁を下し得べき領分がある。即ち是れ人爲の領分にして、人の意志は此の領分に於て全權を握つて居る。之を自由自在に作爲することが出来る。換言すれば、人は其の資性の如何に拘らず、其の品性上に適意の印象を刻み込むこと出来るものである。彼の名工を見るに、一たび其の手に這入つた以上は如何なる木片でも、之を彫刻して、巧に己の理想を實現せしむること出来るではないか。

乃で人が美大なる品性を畫くには四つの特徴がある。第一潔直なる良心、此は品性の榮譽となる。第二健強なる意志、此は品性に勢力を與へる。第三仁愛なる心、此は品性の光輝となる。第四儼正なる儀容、此は品性の品位を高むるものである。

此の道義的特性が美大なる品性を組織し得ると云ふことは、毫も疑なき所

である。然るに此の四箇の特性は氣質には關係のなきものであつて、此の特性は彼氣質よりも此氣質の結果であるとは云はれぬものである。此の四箇の特性は程度こそ異なれ、如何なる氣質にも接觸し得べきものである。人は如何なる氣質の者でも、其の生來の習癖を矯正しなければならぬ所があるから、始終其の良心に従ひ、困難に處して恐れず、心に仁愛を保ち、外容にも威儀を失はぬやうに務めねばならぬ。高尚なる品性を作るは、決して一時の道徳的努力の結果とも云ふ可き稀有孤獨の行爲の能くし得べき所ではない。心の奥底に善傾向を植付けて、殆ど天性自然の要求に出るが如く、常に良心正しく意志強く、心仁愛に富みて、風貌にも間然する所なきやうでなければならぬ。

今左に理想的品性の四つの特徴につき尙ほ説明を試みて見やう。

(一) 潔直なる良心

良心を以て理想的品性の特徴の第一位に置く所以のものは、良心の人のみ

吾人の尊重すべき者であるからである。良心を蹂躪して顧みざる者は、吾人殆ど本能的に之を唾棄するのである。其の言語の不眞實なる、其の行爲の不忠誠なる、逆も之に信を置くことは出来ないから、自然之を避けて、人物を以て目せざるやうになるのである。蓋し正直は人生榮譽の第一の條件にして、吾人信用の最始の標目である。今茲に人ありとせんに、意力があつて、精確でもあり、親切でもありとしても、若も虚言者で不正直で良心に背くことを何とも思はぬ者であるならば、場合に依つては屹度自分の友をも裏切するやうなことがあるに相違ない。此の如き者は他に如何なる美質を備へて居るとしても、吾人は下劣なる品性として視る可きである。一たび良心を缺くあらば、最早萬事を缺如して居る者と目す可きである。然らば良心とは如何なるもので、其の人生に對する職責は如何なるものであるかと云ふに。

ジュベールは良心に就て頗る明確なる解説を加へて曰ふには「人は統治者

を其の心中に奉戴せざるべからず。心中に於ける統治者は外傍に於ける統治者よりも一層良席を占め且つ一層勤勉なるものなり。如何なる人も此の統治者を歓迎すべし。然して良心の中に此の統治者の席は常に準備せられ居るなり」と。故に良心は中心の師の如く、其の教戒止む時なく、日夜監督して眠ることなき者である。

乃で良心の人生に對する天職を明に言顯はさんとするには、左の如く言ふ可きである。良心は誠實なる忠言者である、有力なる馬勒である、有驗なる刺針である。

良心は誠實なる忠言者であると云ふ、何となれば良心は豫め危機を指示し又義務を執行すべき時期に至れば之を想起せしめ、常に心目を善行壯舉に傾注せしむるものであるからだ。

良心は有力なる馬勒であると云ふ、何となれば良心は意馬心猿を制し、情風慾濤を御し、慘憺たる失敗と取返しのかね禍害とを豫防するからである。

良心は有驗なる刺針であると云ふ、何となれば惰眠を醒まして活動せしめ、昏睡を破つて蹶起せしめ、迷夢を攪亂して正道に就かして、困憊を督勵して、一大飛躍を試みしむるからである。

良心の未だ醒起せざる人がある。彼は修養なき故、丸で子供の如く、善惡に就て明確なる觀念なく、粗笨なる本能の犠牲となつて、陋劣なる生を送つて居るが、然し此は惡むべしと謂はんより、寧ろ憫む可き者である。又良心を多年の間抑へ、破り、蹂躪した爲に、遂に鈍り衰へ、殆ど亡びんとしつゝある人もある。此は實に取るに足らぬ人間と謂はねばならぬ、何となれば、嘗に高尚なる感情が最早勢力を失つて居るばかりでなく、此の慨嘆すべき良心萎縮の状態は、罪惡を屢々重ねた結果であるからである。其他天幸に依りて良心が健全に活動して鋭敏なる感性を保つて居る人、良心の命に耳を傾けて聽き、忠實に之を遵奉する人もある。此等の人々は其の良心に従ふ程度に於て美大なる品性の特徴を備へて居る者である。

良心ある人は三種の特徴によつて識別せられる。即ち其の地位の義務に就て高尚なること、其の誠實の點に於て嚴正なること、他人の利害を處理する時極めて潔直なることの三つである。

良心は義務に就て特に高尚なる觀念を與ふるものである。良心の眼には義務はそれ自ら重大なるものとして映じ、如何なる人の意志よりも優れたる權利を以て命ずる者と思はれる。人が良心の全權によつて支配せらるゝときは、義務に接して如何なる推論をなすかと云へば、左の如くである。「此の責務は人より出で來れるものではなく、天より出で來れるものである、而して天の照鑒する所は我良心それ自らより外はない。人々の満足するものは我れ之を好む、否、之を希望する、然し我が大切とする所のものは唯だ一つ、即ち我が良心が之を善く證認して呉れることである。設令天下の人々が我を誤解しても、我は其の非難毀貶を避けんが爲に、良心に背馳するやうなことは斷じてせぬ積である。若し是が明に我が義務であると云ふ以上は、何事があつても

我は之を行ふ、而も我は之を速に行ふ、悦んで行ふ、我が微力の及ぶ限り細心留意して之を行ふ。或は地上誰も我を見て居らぬかも知れぬ、誰も注意して呉れぬかも知れぬ、然し我はそれに關らず之を行ふ。我が行ふ所の事を誰も氣を附けずして鑑識する人がないかも知れぬ、それでも我は關はず出來得る丈け心力を盡して行ふ積である云々」と、あゝ世には焉いかによりも高尚な言論があらうか。然るに此の言辭は直に是れ良心が之を命じて、之を行に施さしむるのである。

諸しよを良心のなき人若くは多少良心の腐敗して居る人に徴するに、其の言辭に於て天地の相違がある。此の如き人は仁愛に指導せられずして、恐怖に驅らるゝことを常とする。彼は現世に於ては刑罰を恐れ、來世に於ては地獄を恐れ、刑吏と地獄とに動がされて事を爲る人間である。彼は始終周邊に目を配つて、人が見て居らぬかを見て居る。主人の監督が厳しいと思ふときにのみ働いて、其の目を偷むことが出來るや否や、手を拱して仕事を眺めて居ると

云ふ始末である。如此な人間に限つて人の毀譽褒貶に氣を附け、譴責を恐れ責罰を恐れるから、成る可くそれを逃るゝやうに働いて居るやうなものゝ、それ以上には何もせぬ、奮發だとか、寛大だとか、忠誠などを一向に知らぬ。是は人に事へる時ばかりでなく、神に奉仕する時にすら此の下劣な道徳が出るのである。小人と云ふものは人に奉公する時に卑しければ、神に奉仕する時にも卑しいのが常である。之に引き換へて高尚なる品性の人は神明の面前にも亦人間の面前にも高雅なる良心に従つて義務を義務の爲に行ふものである。天職の前には自分の氣象をも犠牲に供し、義務の前には自分の德行をも獻げると云ふのが、即ち是れ偉大なる品性の第一の特徴である。

次に誠實の點に於て嚴正であると云ふことが良心ある人の第二の特徴である。忠實の點に於ては良心は實に小心翼翼たるものである。良心は思言の不一致を太く嫌ふものである。用意周到にして無暗の言を吐かざると共に、眞實を重んずる念の深き露毛程も之に抵觸することを恐れて居る。虚

言は本能的に之を嫌忌し、秋毫たりとも虚偽の坂に意志の傾き滑るやうなことあれば、痛心の極みと思ふのである。誠實の徳に背く言葉を斷然禁止するのみを以て足れりとせず、一種の人々が智巧のやうに思つて居る卑劣不忠實なる行動を太く嫌忌して、是は正道に背いて居る事と非難するのである。

品性を失墜する態度として嫌忌すべきものを列挙すれば、先づ第一人評を憚る事、此は意志の弱味より出るものにして、人を恐れ、人の冷笑又は嘲弄を避けんが爲に、正當の觀念、善良の感情をも隠蔽し、徳行をも恥しく思ひ、良風美習の行爲をも差控へるのである。第二假偽、此は卑怯陋劣の心にして、暗冥に就て惡を行ひ、正直に自白すべき事があつても、知らぬ爲を學て黙つて居ることである。第三僞善、此は徳の假面にして、虚偽の人が之を顔に被り、管に其の惡を隠すばかりでなく、善の外面を装ふて尊敬と恩眷とを釣らんとするのである。第四食言、此は約言に背く不忠實で、心術陋劣の徴候である、賤しい利益の爲に嘘を吐き、法律上の制裁を受くる事でなければ、行はなければならぬと思

はぬ。第五、二心、此は二枚の舌を使つて諂つたり、毀つたり、面従後撃すること、洵に憎む可き惡である。古經に太く之を呪詛してあるのは、人々の間に不和の種子を蒔くからである。

尙其次に良心は他人の利害に關する點に於ては極めて潔直である。是れ亦道德上の美質の一特徴で、良心は之を品性に添へるのである。此の潔直は自分に託された要件を嚴密に守る唯一の道である。金錢、秘密、評判、其他凡て吾人の手に託された大切な事物は、良心の心法でなければ、保たれぬものである。

金錢問題に就ては良心は廉潔を保つに有驗なる唯一の監督官である。財政上の管理法は如何に巧に出來て居つても、巧獪なる者は検査の細い網の目を潜つて、上手に自分の利益を計るものである。况や信用されて渡された金を處理する時に、誰も之を監督する者がなければ、必ず自分の利益の方に理窟を附けるに相違ない。盜むことを禁抑せんには、手を縛つても駄目である、心

を縛らなければならぬ。何となれば心が貪慾であれば法網が如何に密でも、何時でも脱する道を知つて居る。然るに心を縛るには良心の外道はない、隨て人の品性に些の猜疑をも容さざる品位を保たしむるにも、良心の外に道はないのである。

金錢よりも大切なものは秘密である、例へば吾心中の状態、吾思念、吾情慾、吾苦悶、若くは吾家庭の内情又は財政上の有様等即ち是である。一方では吾人は自然之を言顯したい性質を有つて居る、何となれば之を言顯せば何となく心が軽くなるやうな氣持がするからである。他の一方では之を吹聴してはならぬ必要がある、何となれば之を公けにすれば、吾人の信用若くは名譽を傷ける憂があるからである。乃で若し仁愛の徳が吾人に人の言葉を聽て、其人を慰めなければならぬと云ふ義務を負せるならば、正義の徳は吾人に人の信用名譽を失墜せしめぬやうに黙つて居る義務を擔はせると云ふ事を記憶しなければならぬ。然るに此邊の事を加減して、適宜の處置に出ることは、高尚

なる品性を巧に運用する者でなければ出来ぬことである。重大なる利害の係つて居る秘密を言顯はすと言ふことは、良心の醒起して居らぬ輕薄の人か左なくば良心の下劣なる悪人の爲る業である。故に良心は舌を箝し口を緘する術であること、猶金圓の受託を保つ爲めの封蠟の如きものである。

然し人生萬寶の中に評判程大切なものはない。故に聖經にも『汝の名譽を保たんことを務めよ』と記してある。評判は吾人の名譽其者と謂ふても可い。吾人は評判によつて或は尊敬を受け或は輕蔑を受けるのである。吾人の信用を招き若くは不信用を來たすのも、亦評判に由るのである。評判が善ければ、吾等の心身の位地境遇を榮譽にするし、評判が悪ければ、吾等の頭上に凡ての凌辱を招くのである。然るに名聲と云ふものは他人の手中に在るもので、一寸誹謗がましき言葉とか又は嘲笑の意を含める口吻があれば、直ぐに之を失はしめることが出来るものである。此際如何なる者が斯く大切に於て而も斯く脆き寶を保護するかと云ふに、それは良心ばかりである。され

ば吾人の一生は時々刻々他人の良心に繋つて居るやうなものである。吾人は他人の高雅なる良心によつて救はれて居るやうなものである。毒舌を放つて他人の名譽に致命傷を與ふるが如きは、品性の卑陋にして良心の下劣なる者ならではせぬことである。

述べて爰に臻れば、十分に自分の良心に服して居る人の品性の嘆美稱讚に價して居ることは、最早言はずして明である。其の勢力如何、其の榮譽如何は如上叙説した所によつて既に明々白々であるが、尙直接に之に就て少しく語れば、

其の勢力の偉大なることは、己の義務を盡すに己だけにて十分なることに分る。其の道德的威力は他に何等の借りる所なくとも、己の心の泉源より自ら湧き出るのである。怯懦なる人は他より威嚇せられるとか又は奮勵せられなければ、自ら行動に出ること出来ないけれども、良心ある人は中心に發

動機を有つて、それが義務を明に心得て居るから、之に接するや否や、直に自家心中より發條するのである。

良心は又勢力の本源である。意志をして何も爲さずに惰眠を貪つて居ることを許さない。之を覺醒し、之を鼓舞し、之を練磨し、之を以て其の發達を促進するのである。事業を經始するとき意志を支持し、斯くして一たび企てた事業に繼續持久の精神を保たしめて、有終の美を收めしむるものである。尙ほ良心は人に剛健の氣象を傳へるものである。就中義務を盡すに克己、献身の苦しきことがあり、危を冒し、險を履むの必要に迫る時に於て殊にさうである。翻て他の方面より觀察するに、良心は意志に斷乎たる決心を與へ、精神に絶對的安心を齎すが故に、此點に於て一種の勢力となるものである。始終良心に従ふと云ふのは、直道を歩みて、逡巡することなく、躊躇することなく、又自家撞着することなきの謂である。一たび良心に背いて、或は虚言を吐き、或は不正の舉に出で、或は又義務を破るやうなことがあるならば、必ず心配と不安心

とに陥つて了ふ。何となれば自ら悔つて品性を失墜するばかりではなく、尙又其の詐譎の發覺するかを恐れるからである。乃で其の失計を避けて安心しやうと思ふが爲に、種々に心を配り、千々に思を碎くけれども、百計盡きて多くは失敗して了ふものである。其時漸く目が醒めて遅いながらも平和は誠實に存し、勢力は正道に在る道理を考へ付くのである。

榮譽も亦健全なる良心でなければ、花を咲かぬものである。

天も亦良心のある人でなければ愛眷を垂れぬものである。聖詩作者の詩に『嗚呼イスラエルの上帝よ、帝の誠心の人に愛憐を垂るゝの深き、誰か之を言顯し得んや』と云ふ句がある。天が人の功を稱揚せんとする時には、必ず其の誠直を嘉するのである。『吾臣ヨブの如き潔直なる者を見たることありや』と云ふ上帝の魔魁に語れる言があるに徴しても瞭かである。新約の道によつても人を判断するに此の以外の定規はない。基督の言に『汝の目若し瞭ならば、則ち汝の全身光り、汝の目若し眊からば、則ち汝の全身暗し』とあ

る。然るに人の目とは即ち是れ良心を指すのである。人を榮譽若くは恥辱の境に置くものは、良心である。加之、天の法廷に於て、裁判せらるゝ所のものは何物であるかと云へば、良心より外にない。忠誠なる良心は永遠の賞を受け、不忠誠なる良心は永遠の罰を受くるであらう。天の良心に對する實に此の如くであるが、實は天の眼より見れば、人の人たる所以全く茲に在るからである。

此點に於て人の裁判も亦天の裁判と違ふ所はない。良心の不忠實なる者を侮辱して、忠誠なる者には榮譽の冠を呈するものである。

人は實行的生活に於て如何程弱い者でも、原理の領域に於ては甚堅固なる者である。人は虚言を悪んで、虚言者の稱を此上もなき恥辱に思ふものである。隨て公けに虚言者と吹聴せられた者は、最早世に凡ての信用を失つた者である。不義理と云ふことも亦甚しき汚辱である。『貴下は盗人である』と言はれた人は、必ず武器を執つて若くは法廷に訴へて名譽を回復せんとする

ので、此の冤を雪がずんば終世の恥と思ふのである。是故に人の眼から見て虚言詐欺若くは偷盜と公けに認定せらるゝよりも、人品を失墜することはないのである。

此の如き制裁は、嚴酷は嚴酷であるけれども、然し正當である。社會には制裁の必要がある。社會の秩序は凡て國民相互の信用に基いて居る。各自他より欺かるゝやうなことはなからうと思はなければ、世の安寧幸福は保たれるものでない、然し如何にして他人に就て安心することが出来るか、誰が其の誠實、其の言の信なる事、其の我が權利を重んじて呉れる事を保證するものであるかと云へば、其人の良心に訴へるより外はない。其人にして良心あらば、我は安心することが出来るが、若も良心がなからうものならば、我は始終信用不安心の境に居らねばならぬ。

されば良心によつて道義的義務を行ひつゝ、社會の爲に安寧秩序の要素となつて居る人々は、實に榮譽の地位に立つ可き者である。

之に反して良心を蔑にしたる行をなし、社會に取つて恥となり、危険となるやうな人々は、汚辱の地に在る可き者である。

偉大なる品性の人は、良心の大法を重んじて能く、之に服して居るから、良心が神聖なる義務として命ずる所のものは、人知れぬ處に於ても之を蹂躪しない。之を蹂躪せんよりは、名譽、財産、其他一切の物を失ふに如かずと思ふて居るのである。

(二) 強健なる意志

潔直なる良心は人を光榮の地位に立たしめて、同胞兄弟の尊敬を博せしむるものであるが、最早之を以ても強健なる意力を示すものであることが明である。強健なる意力は偉大なる品性の魂である。是故に余は人を尊敬せしむる美質即ち良心を第一に述べた後、直に其の勢力を高むる美質を説かんとするのである。兎に角意志の無き所には人物はない。意志の消長によつて

人物の大小が定まるのである。

意志の性質に就ては誤解する者が尠くない。妨害に對して憤然として怒る激情や、理窟のない情を通さん爲に满腔の熱血を傾注する剛愎や、權利を鼻に懸けて無暗に人を壓屈する暴戾や、嚴格を装ひ、勇氣を誇示せんとする態度や、皆以て強健なる意志の徴と見做すべきものではない。若夫れ無感覺の如きに至りては尙更に其の證徴となすべきものではない。何となれば苦痛の衝に立ち、懊惱煩悶の裡に在り、若くは真正なる愛情の措置に接して、平然として無感覺で居ると云ふことは、冷酷無情なる性質の徴にして、大丈夫たる者の品性の徴ではない。之に反して世には外來の喜ばしむべく怒らしむべき事柄に接して、高尚なる男兒的勇武を示す者がある。又道德上失敗したことの無いのを以て意力の明徴となすべきものでもない。何となれば誘惑のない時に失墜しないのは當然にして、何でもない事である。之に引き換へて意力の強い人の一生中にも大なる過のあることがある、但だ其の過たるや日蝕の

如く一時一刻の凶兆である。

若し片言以て意志強健なる人を言顯なせば『自治の人』と云ふを適當とする。マルク、オレールの言に『汝自身の治者となり、順境に處しても亦逆境に處しても勇健なれ』といふことがある。フランソア、ヅサルも亦自治克己のこととを稱讚して『己の心を把持して能く之を制御し得るは、人生の至幸なり』と曰つた。獨逸の哲人の言にも『天の人に與ふる至福は終生我の我たるを失はざるに在り』とある。某道學的醫師の曰ふには『汝に缺くる所の者は、汝それ自らなり、我汝を除いて更に何をか命せん云々』と。勿論獨逸の神秘學者トールール氏は福音書の意を咀嚼して左の如き言を發したに相違ない『我自らを捨つれば、我れ神を認む、我自らを認むれば、我れ神を失ふ』と。然し余は後條にも述べる積であるが、吾人は各々二個の人を自家心中に有つて居るもので、凶の人を壓屈して、初めて靈の人に勝を制せしむることを得るものである。

然るに此の自治の人となるには二個の條件を要するものである。超脱と統治即ち是である。超脱とは凡ての煩惱羈絆を排し去りて、活動自在なるを云ひ、統治とは自家心中の寶庫に蓄へてある勢力を行使して、之を善業を行ふ資に充つるを云ふ。此の加く超脱して自らを統治して居る人は眞個に己自らの治者である。其の獨立不羈や貴く、其の精力を用ゆるや強くして、本統に意志のある人である。是れ實に品性の存する所である。

自治を決心せる人の第一の責務は超脱である。意志の弱き者を虜にして辱しめて居る桎梏には三種あるが、之を破却しなければならぬ。所謂三種の桎梏とは外界の事變、人間の影響、及内心の情慾即ち是である。

世には臆病なる者は澤山あるが、此等の徒は外界の事變例へば病氣とか、破産とか、家庭の禍殃とか、又は時候の不順及其の影響とかを太く恐れて居る。彼等は天然と目するに無慘なる車輛を以て人を粉碎する器械のやうに思ひ

車輪の齒は殘酷にも時々刻々人を捕捉せんと威嚇しつゝあるものゝ如くに考へて居る。此の憂慮の下に弱き意志の人は戰慄して殆ど何事も行ひ能はぬものと思ふて居る。若も其の恐れて居る禍が身に接近すれば、直に挫折して最早奮闘すること出来ぬと覺悟を定め、甚しきに至りては悲嘆に暮るゝことがある。

然し強勇なる意志の人に至つては、此の外界的事變に對して、薄弱なる意志の人と大に撰を異にして居る。彼は強迫に逢つても心を動かさず、打撃に遇つても志を挫かぬ。彼は又能く心得て居る、人は天の茫々たるに對しては極めて小なる者ではあるが、然しながら其の賢明なる智略を以て萬物の靈長たることを得ると。是を以て決然として戦闘に入り、物力の爪牙を脱せんが爲に有らざる才能を悉く發揮するのである。彼が重病に對して用心を以て避け、信仰を以て癒した所のもの幾許なるか知れぬ。財産に對しても冷靜以て其の破滅を豫防し刻苦以て其の非運を挽回したること幾回なるか分らぬ。

設令禍害の避くべからざるものに遭遇しても、亦恐るべき打撃を避くること不可能にしても、決して失望落膽しない。其身は宇宙の破却する所となつても、始終道徳的凱旋者たるの姿勢を保つて居る。

品性を備へたる人の苦痛と戦ふ程美觀大觀はない。彼は人性の行路中之に遭遇することを毫も怪まない。何となれば彼は世に苦痛の運命を有たぬ人生はないと云ふことを明に心得て居るからである。故に之を恐ろしいものとして避けず、寧ろ歓迎すべきものとして當面に進み行き、或は之に尋問して其の教訓を聴き、或は之を抱擁して其の利益を收めんことを務める。彼の短慮は強者を亡ぼすものにして、耐忍は弱者を助くるものなることを心得て居る又ジユベールが『天は時運に命じて不幸なる者を慰めしむ』と語れるが如く、頓て暗愴なる日が経過し去りて、光明なる日が輝き來らんとて待望して居る。彼は又苦難の時期と雖も人生に無効にあらざることを能く知つて居る。彼れ以爲らく、人生は『我れ苦めり』と書かなければ、一種の白紙に過

ぎない。艱難は人の惰眠昏睡を攪亂して、精神及心情の發展に必須缺く可からざるものである。人生は手に鐵の鞭を携へて各人に其の辿る可き道を指示して居る。『名工の銳利なる穿刀の下に於てのみ、人生の石像は目鼻が附いて來るのである。』人が快樂の毒針によりて致命傷を受けないのは、苦痛の驅針のお蔭である。』

品性を備へたる人は苦痛の天然の道理を明に見て居るから、之に砥礪せられて、艱難辛苦の裡にも屹然として立ち、自ら沮喪することもなく、氣力が弱つて手をダラリと下げるやうなこともなく、却て活動的努力を引起し、物質的世界の事變は行動の妨害ではなく、寧ろ活動を奨励するものであるを知見して居るから、甘んじて、勇んで、且餘命を利用し得るを喜んで、身を事業に委ぬるのである。

*

人は此の如く意力を揮つて、物力の隸屬を脱却し、又人間の軌にも壓されな

いやうに氣を附けねばならぬ。快男兒たる者は始終偉人ボールの高言たる『今や汝等基督の寶血を以て救贖せられたる者なれば再び人間の奴隸となる勿れ』を耳底に留存して置かなければならぬ。乃で何人が人の奴隸でないと言言し得るかと言ふに、即ち吾を傷害する人に接しても、吾を強迫する人に面しても、亦吾を誘引し、吾に阿諛を呈する人に會しても、堅く吾心を失はずして志を奪はれざる人こそ自治克己の人と謂はねばならぬ。

世には荆棘の如く、寄る人障る人を傷くる厭な品性を持つて居る者がある。人愈々之に迫れば、愈々之を毀傷する。即ち意地の悪い批評家、罵詈、中傷を事とする者、無暗に譴責する者、怒言を吐く者、過激なる處分に出る者、黙つて憤つて居る者、不安で差控へて居る者、不義な反對を試みる者、意氣の相投合せぬ者等である。此種の人々は實に煩く不快であるが、然し遂に我等を支配する様になる事がある。我等は此等の人々の前に出ると、心を失ひ志を奪はれて了ふ事がある。我等の意志は臆病の爲に萎縮して了つたり、又は強迫に會

つて喪失して了ふ。臆病の性は心の活動を弛めて、我等の元氣を減少し、衰滅して遂に烏有に歸して了ふものである。若し我等にして眞個に超脱して居るならば、よしや外部の傷害に全く冷熱を覺えず、痛痒を感じないとは云はれぬかも知れぬが、心の奥底が攪亂さるゝなどの憂は毛頭なく冷靜に吾人の責務を遂行し得らるゝであらう。外來の悪評を恐れて中心に善行美舉の天啓を消失して了ふやうなことはない筈である。悪品性の人に接して堪忍を失ひ、一朝怒氣に驅られて、多年辛苦の効果を畫餅に歸するやうな人に向つて余はニコル氏の左の言を提供しやうと思ふ。『他人の過失や狂妄に就て怒るは、天候の快晴ならぬ事若くは餘り寒暑に過ぐる事などに就て焦立つと同様に馬鹿らしき事なるを考へざるべからず。何となれば斯る場合に怒りたりとて人を矯正することも、氣候を變化することも、共に叶はぬ事なればなり。尙焉よりも馬鹿々々しき譯は、氣候に對して怒りたればとて、氣候をして尙一層悪くすることも叶はず、善くすることも叶はざれども、人に對して憤るときに

は我に向つて益々之を怒らしめ、其の激情をして尙一層過當激烈ならしむる害あり』と。吾師の言は是に到つて益々眞なるを覺ゆ。曰く『人は堪忍によりて、始めて己を保持するを得べし』と。

強健なる意志の人は強迫する人に逢つても己の心を失ふものではない。我に向つて命令權を執行するとも、勸誘權を執行するとも、若くは又強迫權を執行するとも、品性の高きときには、我をして益々我たらしむるのである。

我は正當なる權利に背き若くは之を非議するが如き考を毛頭起さず、權利に對しては至上の尊敬を拂ふて、其の命令に絶對的服從を呈するものである。但だ服從には品性を高むるものと品性を下ぐるものとの區別がある。後者は受動的服從にして殆ど器具同様に扱はれるものであるが、前者は能く事理を解したる活動的服從にして、人の命する所を愛し且好むのである。隨て働きは我に在り、我其の功を收め、益々人物の實を示すに至るのである。吾人は外來の勸誘以外に立つて超然逸脱して居る人は世甚だ稀である。

四圍の人々より如何程影響を受けて居るか知れぬ。時には明に知つて之に従ひ時には毫も氣が附かずして之に服して居ることがある。同僚にして我等の毫も疑はぬ者もあれば、頭株にして我等の弱味を利用する者もある。或は惡漢にして我等の正直に附込む者もあり、時としては家僕に欺かるゝ事もあり、又多くは女色に迷はされるのである。此等の人々の思想と感情が遂に我等を虜にして下ふ。我等は自分の考を述べ、志を行ふ積であるが、其實我特性を失つて、人に使はれて居ることが多い。

若し人が我に對して威嚇的手段に出るときは、我は一層氣を附けて、意氣軒昂の心持がするのである。若し我にして好戰の心あるならば、暴力に對して奮然蹶起し、勇ましく之に抗抵するに相違ない。吾人は如何に臆病でも、少くとも不義な強迫に反抗せんが爲に惰性の力を揮ひ、如何なる事にも挫けず、激烈なる者にも兵器を投せしむるのである。弱い者にも此丈の氣強い心懸は貴重なるにも拘らず、世には強迫の下に屈服して己の確信を打棄て、了ふ

卑怯者が見受けられる。是れは己の個性を失ふ人々の事である。然しあらゆる人間的影響の中で、一番勢力を逞うして、人を奴隷にするものは、誘惑である。暴力に抵抗し得る者でも、多く阿諛に倒る。故に誘惑に襲はれても吾心を失はざる人は、最も勇健なる意志の人であると謂はねばならぬ。

誘惑は凡ての人を打撃する。誘惑は美観を装ひ、粉黛を施し、種々様々の展覽陳列をなして、人の目を奪ひ、其の好奇心を釣るものである。頌讚の辭を費して、其の虚榮心を養ひ、有る情や無い情を以て其心を奪ひ、黄金の光を示して利慾を誘ひ、榮譽の餌を見せて慢心を釣るのである。

隨て誘惑に接する時ほど、品性の大小の顯はるゝ時はない。若し婦人にして意力があるならば、陳列品の美に欺かれて、良心の譴責する破産的買物をするやうなことはなからう。若し男子にして吾心を支配する力があるならば、愛情の係蹄に懸つて、吾家庭に亂脈を來たしたる揚句の果に失望に沈淪する

やうなことはなからう。黄金の爲に良心をも節操をも賣り、爵位の爲に名譽をも思想をも犠牲に供する様な人は、奴隷の境遇に失墜して己の人格を貶賣した感覺がせぬであらうか。之を見るにつけても如何なる妖魔にも眩惑せず意志高邁にして、足下に張つてある網羅に懸らぬ人こそ、尊敬するに足るべき偉人物と謂はねばならぬ。彼は始終己の人格を失はぬ者である。

然れども全然吾心を保持せんには、尙又他に脱却しなければならぬ軌がある。天然に勝ち人間に勝つて後、又己の情慾にも勝を制しなければならぬ。ラコルデルの言に『天下無雙の勇將も、戦捷の翌日には一婦女子に異らず、其の傷痕の下に軟弱無能の品性を隠蔽す云々』とある。ナポレオン第一世は世界を併呑し、天下を席卷したけれども、我と吾心を支配することを知らなかつたのは、其の大患であつて、自治克己の術に暗かつたから、真勇をも真智をも缺如して居つたのである。

人は實に極めて錯綜複雑して居る者である。五尺の小軀なれども、宛然大帝國の概がある。其の帝國內には野心、情慾、我意、感觸、利慾等の民が紛擾を極めて居る。此種の利慾此種の紛擾の心中に於けるは、猶ほ臣民の國內に於けるがごとくである。而して之が統御の權柄は意志の手中に在る。君王の平安に國を治めんとするや、決して其の臣民を壓にしない、但だ之を服従せしめ之に税を課し之に役を命じて、社會の隆運の爲に使役するが如く、意志も亦其の職責を竭さんとするには、天然の傾向と個人の慾望とを滅却しない、却て之を制し、之を御し、場合によりて或は之を弛め或は之を抑へて、之を己の助役となし、決して其の有害なる強迫を受けない。若し傾癖が勝を制し、性質が其傾に従ひ隨て意志が沈黙し、若くは勢力を缺如することになれば、是れ即ち人心の無政府時代である、是れ即ち人格の消失である、是れ即ち自我が奴隸となつたのである、是れ即ち道德的精力の銷沈である。是を以て人は己れ自らを逸脱し、意志を以て自ら己が心界の覇權を握る可きことは瞭かである。

此の覇權は人の覬覦し得る最眞最大の權柄にして、之を肉慾、想像、狂、及氣質病の上に揮ひ之を制御せねばならぬ。

肉慾の奴隸となるほど人を賤くするものはない。人或は食慾に引かされ或は女色に誘はるゝときには、必ず其の品位を墜し、其の健康を害ひ、其の榮譽を失ふに至るものである。肉慾の壓制の下に屈從して、精神痴鈍となり、心性陋劣となり、意志全く其の力を失ふに至るときは、最早理想を見る明もなく、大事を行ふ勇もなく、全く柔弱事に堪へざる人間と化すのである。是故に人生第一の急務は肉慾の捕虜とならざらんが爲に努力する事である。之が爲には先づ第一着に食慾を制しなければならぬ。兒童及び婦女子の甘味なる菓子を好み過ぎる、男子の酒精を嗜み過ぎる、其に是れ品性の弱き徴候にして且つ原因である。特に肉體を焦す色慾を制しなければならぬ。何となれば若し之に笑顔を示すならば、若くは猛獸の如く之を嚙噬しなければ、己れ却て之が爲に翻弄せられ、頓て之が捕虜となつて了ふからである。

然し苦戦の結果肉感に勝を制して道徳的自由を獲得した後、忽然他の空想病とも云ふべき厄難に罹る者世に其例が多い。此病は其源一層高き所に發するが故に、品性には甚だ不吉有害である。何となれば凡て此の如き精神的病患は不安なる好奇心より乃至失望落膽に亘り、心の本城まで攻寄せて、意志の根據を抜かんとするからである。不健全なる好奇心に驅られて、或は危険なる寄席芝居に赴き、或は不道徳若くは疑惑すべき書冊に耽り、或は醜猥なる繪畫に奔り、或は放縱逸肆なる談話を交すが如き者は、最早自己の意志を奪はれたる人間である。空想空想又空想、或は精神を汚す幻像を夢み、或は心を柔弱ならしむる愛情に戀着する者の如きも、亦是れ自己の心意を失つた人間である。一事に偏し、一想に狂し、憎惡の念に驅られ、恐懼の心に襲はれ、仇敵の幻想到に惱まされ、想像の病患に冒されて泣き悲む者の如きも、亦是れ自己の心意を失つた者である。若夫れ悲哀に陥り、鬱憂に沈む者の如きに至りては、最早頓て自我を喪失すべき人間と稱して可い。即ち一種の道徳的錆とも稱すべき

心痛が先づ第一に此より起り徐々と心意を腐蝕するものである。然して失望は其の終局にして、一切の精力を間違なく消耗して了ふ。ラコルデールは巧に之に命名して『男兒性の滅亡』と云ふ。儲此の如く容易く意志を蝕する想像狂を癒す方法は如何であるかと云へば、他では無い、克己を以て好奇心を抑制し、活動を以て空想を打拂ひ、人の正直と親切とを信する心を引起し、己が胸中に自信自任の念を温める事即ち是である。

此の日常の戦闘に於ては均等の氣質は品性に取つて此上もなき援助となるものである。然し氣質も亦過激に出ることあるが故に、之を制御して、意志に至上權を握らしめなければならぬ。今其の極端と極端との二者に就てのみ語らんに一方は激烈に過ぎ、他方は無感に失するから、前者に對しては銜を含ましめ、後者に對しては鞭を加へなければならぬ。

激烈の性は強く之を制止するの必要がある。何となれば其の本性の奔るが儘に任するときには、始終急奔馳突して勢ひ猖獗を極めるからである。之

に衝突する者がなくても、平穩にして居ることの出来ない質である。觸らぬ内に忽ち動き出し、無暗で、向不見で、前後を毫も考へずして種々の失錯間違に陥り、後で初めて氣が附くけれども最早遅過ぎる。業を行ふと云ふよりも、寧ろ丸呑にして丁ふと云ふ風で、善く行はんより、多く行はふと心配して居る。口を緘み、舌を慎むことを知らないから、人の秘密を言顯はし、事業を危くし、人々の感情を害つて了ふ。自分の氣象を抑へることも出来ず、自分の怨恨を隠すことも知らない。障碍物に接するや、其の多感性が急に亢起して、其氣象が怒言暴行に激發して顯はれ、己れ自ら破裂の舞臺となりて、立派に人格を失つて居る狂言を示すのである。此の如き性質の人に向つては、抑制を以て道徳的戰闘の秘訣となさなければならぬ。

然し無感怯惰の性質を支配するにも、意志は餘程の努力を費さねばならぬ。此の性質の人は精力がないと云ふのではないが、其の精力が失望的惰眠で鈍つて居るのである。之を揺つても動しても全く醒め起きることが出来ない。

丸で昏睡の墓に葬られて居るやうなものである。始終緩慢で、遲蒔で、事業に就くには石臼でも引き摺るやうな具合である。終る可き筈の時分に漸く業を始めると云ふ始末である。其の思想にも、其の企業にも、繼續の心なく、持久の精神がない。其の働振にも、其の仕事にも、其の家政にも、特に其の心界にも秩序と云ふものが立つて居らぬ。時間を無暗に費し、生命を空しく送り、心身を漫りに傷ふことばかりして居る。遊惰なる性質の人は自性を失はぬやうに見えるけれども、然し其の平穩なるのは、惰眠を貪つて居るからである。自ら其の惰眠を覺醒すること出来ないから、自ら心意を支配して居るとは謂はれない。

此の如く述べ來るときは己に克つと云ふことは、如何程大任重責であるかが分る。其の獨立自由になるのは一朝一夕の故でない、之を以て兒戲に類する事のやうに思ふは大なる謬である。時を要すること多大にして、殆ど一生を之に献ぐるも尙多過ぎるとは云はれない。力を要することも亦尋常一様

でなくして、恐くは超自然の力にあらざれば成功を期すること出来ぬかも知れぬ。基督が己を棄て、磔を擔ふて我に従へとて、克己の大訓を垂れたのは、丁度此の高尙なる事業に就かしめんとしたのである。此の心戦に勝を制せしめんが爲に謙遜持久の心を以て祈る者に天祐を垂れんことを約束したのである。

克己と云ふ道義的勝利は如何に大切緊要な事と云つても、未だ意志の盡す可き課程の端緒のみに過ぎない。意志は其羈絆を破り、己れ自らを支配し其活動の寶庫を悉く運用して後之が聲價を高めしめ、之に効果を奏せしめて事業に有終の美を收めしめなければならぬ。而して意志固有の本務は志望するに在るから、志望と云ふ點に於て大に勉めなければならぬ。人生の禍は凡て『志望せず』と云ふ所より出で来る。是故に一たび己が心界の主權を握つた以上は、意志缺乏の凶病を全治するやうに努力しなければならぬ。某政治家

の曰く『萬禍を避けんには、志望するを以て足れりとす、人生最も憫む可き状態は志望する力を失ふに在り』と。獨逸の道學者も亦曰ふには『志望することを知れよ、行ふべき所を行へよ、心界の衛生學は凡て此の二語に在り』と。然れども意志には階段がある、決定し、活動し、持久忍耐して、初めて其の極點に達するのである。

未墾の土地に荆棘榛莽が叢生して居るが如く、心田にも荒草蓬々と云ふやうな人がある。思念が充溢し、志望が錯綜し、計畫が續出して居るけれども、確定して居る者が一つもなく、形體を帯びて居るものが更になく、心田の沃土も空しく蓬艸の爲に荒されて居るのは、意志に確定を缺いて居るからである。企畫が多々益々多くなるのに、其中に一つも緒に就て居るものがない、是れは知識の明を缺いて居るが爲ではなく、精力を缺き中心の奮勵が充分でない爲である。何となれば心の奥殿に一事一業を畫せんとするにも、道德的努力を要すること、外界に實際行ふときと大差がない。其の不確定、不決斷は畢竟中

心の病であつて、これが進行すると心的中風に變性することがある。

然しながら決定が明に言顯されて居つても、未だ意志の一着歩のみに過ぎない。設令確定して居つても、外に發して行動に顯はれるまでに強くなつて居らぬことがある。何となれば吾人計畫の遂行中には中心の決定以外に尙ほ前提して居るものがある。即ち心中に凡ての發動力となるものを活躍せしめ、困難を排し、障礙に打勝つに充分足りる丈の強勢を備へなければならぬ。若し意志が下す所の命令緩漫であつたならば、逆も成功の見込はないであらう。故に心界の中心より發する所の活動は強き勢を以て出て來なければならぬ。

斯くして初めて事業が行はれるのであるが、然し事業の始まるばかりでは足らぬ。尙其の事業を繼續して行くのが必要である。然し事業を繼續して行くには意志が持續して居らねばならぬ。即ち意志が充分強固にして、道德的精力の蓄積が涸盡せぬやう、又意志が充分堅實にして、重大なる理由がなけ

れば努力を傾注する方向を變更せぬやうでなければならぬ。意志が此の如き強健の状態に達するときは、抵抗す可からざる力を備へるやうになる。此の意志を具有するときは品性に最大の價值を與へるのである。實際斯境に到達する人は尠いけれども、然し人皆此に到達しなければならぬものである。此の高山に登ることは困難であるが、坂を攀ち登るに随つて、外は眼界益々開け、内は人格益々向上するのである。

(三) 仁愛なる心

品性問題に就て意志に斯くも長大なる言説を費したのは、故なきことではない。意志は中心の骨組で品性の黒柱である。尙又品性の潜勢力である。意志がなければ品性は堅實の性もなく、強勇の勢もなくして存在の實をも失つて了ふ。

然れども余は直に茲に斷言する、意志のみの人は餘り硬骨に失するの嫌が

ある。強大なる力はあるけれども、優美の性を缺いて居る。力と云ふ語は何となく人を傷け人の氣に障り易い意味を有つて居る。意志のみでは品性の角立つた骨格のみに過ぎない。之に軟な温き活ける肉を着せなければ突當つて仕方があるまい。故に意志は人物を支撐するが爲に其の全きを存して居らなければならぬが又心より生ずる徳の衣にも包まれて居らなければならぬ。仁心のお蔭で、品性は愛らしくなるのである。

心の第一の徳は親切である。此徳は懇篤なる心より出るものにして、顔面に温雅の容を示し、和氣霽々として、人は一見直に之に親むのである。善良なる品性の人は必ず此温容を備へなければならぬ。親切なる人は人を迎へ人を容れ、質朴で温順で不快の氣色なくして、満面微笑を湛へて居る。人と喜んで語り之が爲め時間を消費しても厭はぬ。敢て人に諂ふのではないが、其言ふ所何となく人の氣に入る。之に接する者は心安く、胸開け、氣が暢びて、心配が自ら消散して了ふ。彼は人を歡ばしめて、其の勇氣を回復せしむる妙術を備

へて居る。然し此の温容のよろこばしいのは、畢竟人に對する親切の心が顯はれるからのことである。彼は人の事を思ひ、其の惡を忘れ、其の過を見ぬ振をなし、人の正直を認め、其の美質を崇めるから、是れが即ち人の氣に入つて、其の同情を引く所以である。之を某道學者が巧に穿つて言ふには「親切は故さらに智巧を制限せざる可からず。親切は洞察の明に屏風を立て、知的貧院の困窮と汚醜とを直射せざらんことを務むるものなり」と。如何にも人の缺點を見逃せぬ目を有ち、人の過失を恕さぬ舌を有つて居る人ほど、嫌ふ可き品性の者はない。

然しながら親切は表面上の徳であるから、此徳ばかりでは、品性をして多少無味淡泊ならしむるの嫌がある。乃で之に加ふるに同情と云ふものがあれば、心の奥底まで傾けて、得も云はれぬ妙味を興へて、人の心を己に引附けるものである。同情の人は人の困苦を察する明を備へ、之を自らも感じ、之に心を留めて、之を慰めて遣るものである。是れ實に仁慈なるサマリア人の如きも

のと謂ふ可きである。彼は人の困苦の原因如何を究めない。何等かの罪の罰に依て然ると否とに拘らず、始終之を氣の毒に思ひ、慰撫救恤の手を之に伸さんとするものである。乃て此の憐憫の情が品性に如何なる勢力、如何なる誘引力を興ふるかを言顯はさうとするには、某醫師の言を引用するより外に、良好の道はないと思ふ。曰く『人の世に生存して苦み初めたる日より、憐憫の語は人生扶助の最大なるものとなりたり。人は同情深き一瞥見、一握手、一言句、若くは一嘆息に接するに依りて、吾人の種々様々に調劑服用せしむる藥餌に依るよりも、尙一層其の病苦を軽減することあり』と。酷薄なる人は病人の支體に痛苦の印象を遺すに引き換へて、同情ある人は温き慰撫の手を以て忍び切れぬ苦痛をも和げるものである。

心情と云ふものは深く慈愛の念を鼓吹するもので、其の仁愛の爲に品性は寛仁となり、大量となり、又廉潔となるものである。之に反して、心情のなき人は利己の人である、少くとも器局狭小にして、利害の計算ばかりをする人であ

る。然るに今寛仁大度の心ある人を見るに、一たび憐憫すべきものに觸るゝや一切の所有をも擲つて顧みない。即ち金錢の如きは之を己の所有となさずして、貧民の爲の貯蓄物と視做し、人の危急を救ひ、困苦を慰め、不幸を助けんが爲には、貴重なる時間をも費して惜いと思はず、遠き旅をも企て、疲勞をも厭はず、危険をも顧みず、身を殺してまでも仁を成さんとするものである。己に對する報恩は如何に其事快なるも、之を以て己の赤誠の條件とはしない、隨て報恩の事がなくても、敢て不平を鳴らすやうなことをしない。あゝ是れ實に美大なる品性の好模範を示して居る人物と謂はねばならぬ。而して其の社會民人の公益利福に資する所如何に多大なるかと云ふに、スチュアルト、ミルは曰ふのに『此の如き人物は其の生存の期間如何に短少なるも、其の周圍に道德上の幸福利益の泉源を供するものなれば、其の生は一時一刻も無用なりとせず』と。

心が純潔なる愛情の泉源となる時には、品性は尙一段高くなるものである。

其時にはパスカルが言葉を盡して稱讚したる理想的仁愛を生ずるものである。『心身を擧げ、其の凡ての事業を擧ぐるも、仁愛の一言一行に比す可からず』と。何となれば仁愛に富める人は、其の心情深く且高くして、尊敬と愛慕とを拂はる可き人である。其の尊敬に價するは人生最高の完全境に到達して居るが爲にして、其の愛慕を受く可き所以は、同胞兄弟に好箇の避難所を供し、負傷者又は天涯寄邊なき人に生命と休養とを得せしむるが爲である。

述べて爰に臻れば、誰か仁愛の心の品性に寄貢する所を感知せず居られやうか。意志の人は、若も仁愛なる心情を以て、其の嚴格なる所、乾枯なる所、及其の冷靜なる所を和げないならば、我れ自ら其の力の強きに得堪へぬやうになるであらう。要するに其の鐵の手を天鷲絨の手袋で包み、其の頭腦より出る命令を心胸を通して和げなければ、畏敬せらるゝばかりで、決して愛慕せらるること云ふことはなからう。

是を以て自ら幸福の人となりて、人にも益々其の影響を及ぼさんと欲せば

強勇なると同時に仁慈ならざる可からず、堅き決意と共に優雅なる心情を備へざる可からず。隨て其の心情を養成すること、其の意志を養成するにも優りて、十年一日の刻苦經營を積まなければならぬ。實は天性仁慈なる心に生れたる者ほど天幸の者はない、同情の心は勉めずして自然に起り、仁慈の行は自から湧き出で、赤誠の衷情は滿地に花木の發生するが如く煥發するから、生れながら心情に富める人は實に幸福であると謂はねばならぬ。然し設令人は性來此の特典を備へなくても、又稟質の上に自然に寛仁大度の心を賦與せられなくても、左程失望するには及ばぬ、天稟に缺くる所あらば、人爲の業を以て之を獲得せねばならぬ。何となれば、勉めて倦まなければ如何なる習慣でも作られぬものはなく、如何なる能力でも發展されぬものはない。之が爲には先づ資性温雅なる心の人を見、其の言行如何を察して、之に則らなければならぬ。次に屢々世の困難不幸なる者に接觸するの必要である。同情の心は此より起り、惻隱の情も此より挑發せられ、慰藉を傾注して温き心情を言顯

其時にはパスカルが言葉を盡して稱讚したる理想的仁愛を生ずるものである。「心身を擧げ、其の凡ての事業を擧ぐるも、仁愛の一言一行に比す可からず」と。何となれば仁愛に富める人は、其の心情深く且高くして、尊敬と愛慕とを拂はる可き人である。其の尊敬に價するは人生最高の完全境に到達して居るが爲にして、其の愛慕を受く可き所以は、同胞兄弟に好箇の避難所を供し、負傷者又は天涯寄邊なき人に生命と休養とを得せしむるが爲である。

述べて爰に臻れば、誰か仁愛の心の品性に寄貢する所を感知せず居られやうか。意志の人は、若も仁愛なる心情を以て、其の嚴格なる所、乾枯なる所及其の冷靜なる所を和げないならば、我れ自ら其の力の強きに得堪へぬやうになるであらう。要するに其の鐵の手を天鵝絨の手袋で包み、其の頭腦より出る命令を心胸を通して和げなければ、畏敬せらるゝばかりで、決して愛慕せらること云ふことはなからう。

是を以て自ら幸福の人となりて、人にも益々其の影響を及ぼさんと欲せば

強勇なると同時に仁慈ならざる可からず、堅き決意と共に優雅なる心情を備へざる可からず。隨て其の心情を養成すること、其の意志を養成するにも優りて、十年一日の刻苦經營を積まなければならぬ。實は天性仁慈なる心に生れたる者ほど天幸の者はない、同情の心は勉めずして自然に起り、仁慈の行は自から湧き出で、赤誠の衷情は滿地に花木の發生するが如く煥發するから、生れながら心情に富める人は實に幸福であると謂はねばならぬ。然し設令人は性來此の特典を備へなくても、又稟質の上に自然に寛仁大度の心を賦與せられなくても、左程失望するには及ばぬ、天稟に缺くる所あらば、人爲の業を以て之を獲得せねばならぬ。何となれば、勉めて倦まなければ如何なる習慣でも作られぬものはなく、如何なる能力でも發展されぬものはない。之が爲には先づ資性温雅なる心の人を見、其の言行如何を察して、之に則らなければならぬ。次に屢々世の困難不幸なる者に接觸するの必要である。同情の心は此より起り、惻隱の情も此より挑發せられ、慰藉を傾注して温き心情を言顯

はすのも亦此に依つて行はれるのである。人或は此の如き行爲は多少人工的にして、勉め強ひたる遺跡あるを免れぬと曰ふかも知れぬが、然しそれは心配するに及ばぬ初め義務として行つた事でも頓て容易き事になつて了ふ。暫時の間辛抱をすれば、忽ち習ひ性となつて了ふ。博物學者の言に據れば、凡て生物の機能は習用によつて發達すると云へば、仁愛の心も亦善行美舉を反復修練するに依つて漸次に發展するものである。其の結果は勉強次第であつて、若し心の修養を怠るときは、品性を富ましめ且つ美ならしむる特性を失はしむることになる。

(四) 嚴正なる儀容

儀容は人の道徳上の衣服の如きものである。儀容は人の外容を飾つて、禮讓に背く所のないやうにするものである。儀容を缺いて居ると云ふのは、服裝修らず、言辭賤しく、舉止粗野にして、吾人が威儀あり品格ありと認むる所に

適合せざるを謂ふのである。

勿論儀容は相對的のものにして、其の規定は境遇位置によつて變はるものである。都人士と田舎漢、紳士と工夫、其間自ら言語舉止を異にして、社會的階級各々其の習俗があるから儀容を備へると云ふのは、人各々其の階級に應じて言動するを謂ふのである。

儀容と品性とは如何なる關係あるかと云ふに、或意味に於ては優美なる儀容を備へて居りながら、極めて惡品性の人あり、美なる品性の人でありながら、儀容の揚がらざるものもある。若も品性と云ふものが氣分をのみ指すもので善い氣分、悪い氣分、優しい交際、六箇敷い交際と云ふやうなものであるとすれば、儀容と品性とは二者全く相關せざるものと謂はなければならぬ。然し品性をズット高尚なる意味に取り、人の道徳的特性を意味し、余の本章に述べたる所の理想に適合すべきものであるとするならば、儀容と品性とは密接の關係あること、疑を容る可からざる所である。即ち善美なる儀容は大に品性の

品位に關するものであると謂はねばならぬ。故に茲に儀容の説明を附記しないならば、所謂理想的品性も不完全の譏を免れぬであらう、否、可笑なものといふはねばなるまい。

品性と儀容とは主として左の三様によつて關係して居る。即ち儀容は品性を發揮するものである、儀容は品性に影響して之を作爲するものである、儀容は品性の社交的勢力を損益するものである。

上述の如く儀容は人の外容一切を謂ふので、即ち其の衣冠其の態度、其の舉動、其の進止、其の會話、其の作法、其の交際、其の禮讓に篤き事等是である。但し此等は外容とは云ふものゝ、其實は人となりを示す明かなる寫真鏡のやうなものである。如何に其の身の持方が上手で、又如何に其の心情を矯むるに巧みなる人であつても、其の心事を外貌に顯はさぬ者は一人もない。それ故に令世故に長けざる人であつて、相貌を一々詳しく見分けることなど出来ぬ人と云はれても、歷々と外容の上に顯はるゝ所のものを毫も看取することの出

來ぬ者はない。普通の常識でも亦茲に誤るやうなことはない。人の相貌を見るや、其の品性を判斷するを憚らず、外部に顯はるゝ所を見て、之を内部の明鏡のやうに思ふのである。

果して然りとせば、儀容は品性の恒在的表白である、一種の展覽と謂つても可い。是故に衣服が做れて不潔であり、家室が混亂して整はざるときは、其家の主人は確に放置ほうしの人に相違ない。言語野鄙にして賤民と交はるを好み、舉止散漫にして、些も禮讓の美風なきときは、威嚴品位の缺けて居る人であることが分る。日常の義理を缺いて、訪問を怠り、書信を疎にし、又は婦人に歩若くは座を譲らず、長坐無遠慮又は不作法にして人を困らす人ならば、怠慢無禮の譏を免るゝことは出来ぬ者である。餘りに服裝を凝らし、故さらに舉止を嚴にし、言葉を飾り、交際振りなどを美にする者ならば、必ず高慢虚飾の人であるに相違ない。缺點に就ても美質に就ても、人の批判は凡て皆此の如くである。故に批判を下す人を悪しざまに訴ふべきものではない。若し其の批判

が氣に入らぬならば、品性を修養して、外容を正しくし、人が善美なる儀容と見て、良好なる品評をなすやうに勉めなければならぬ。或は又直接に儀容を作ること努力しても宜しい。然るときは其の働きの効が行爲の源にまで遡り、遂に品性の上にも改良の好果を及ぼすに至るであらう。

何となれば身體の態度が心靈の動作にも影響し、或心情を外に表明すれば、遂には心にも之を起し若くは之を發達せしむるやうになると云ふ事は、明に證據立てられた事實である。催眠術は此點に就て極めて意味のある表明をなすのである。催眠的狀態に在る人は、之に命ずる舉動に適應する思想及び感情を起すと云ふ。故に若し之に合掌せしむれば、祈禱をなし、若し之に拳骨を作らしむれば、怒つて罵倒の言を吐くと云ふことである。醒起の狀態に在りても、態度の影響は矢張現實なもので、例へば跪て經文を誦へる人は、頓て中心に祈禱の觀念が起るやうになる。嫉妬若くは反情を直さんと欲せば、其の當人に向つて恰も親友に對するやうな戀情友愛を行ひさへすれば可い。此

の原則は自然の法則としても既に十分に興味のあるものであるが、之を實際に應用するときには非常に効驗の著しいものである。何となれば外容をさへ矯正すれば、内心を改良する爲めに十分働いたと同様の結果を來たし、高尚なる儀容を教ふれば、善良なる道德を教ふると同じ効果を奏するのである。

他事は措き單に品性にのみ限りて言ふも、品性は儀容に關して居ることは争ふ可からざる事實である。凡て儀容に缺けて居る所あれば、直に品性に影響を及ぼすもので、舉動の賤しき、進止の女々しき、服裝の亂雜なる言語の野鄙なる、賤しき人と交際を好み、居酒屋的の風をなす傾きある等皆是れ品性を失墜せしむる行動である。何となれば心情は其の語る所の言葉と其の行ひ馴れて居る習慣と直ぐに一致して了ふからである。之に反して言語は始終重しく、對話は高尚に、舉動は閑雅に、進止は優美に、服裝は地位身分に應じて之を作ると云ふやうに注意して居るならば、品性は此の如き言行舉止に支撐せられて、必ず威あつて猛からず、高尚にして虚飾なしと云ふ風になることは疑

ない。世の教育家が兒童を養成する時に利用するのは、此の儀容の品性に及ぼす反響作用である。教育家が高尙なる觀念を兒童の心に惹起せしむる爲に奨勵勧誘するのは、決して無用ではないけれども、それよりも其の言語舉動に絶えず注意着眼して居ることは、尙一層確實にして特に尙一層永續すべき効驗があるのである。

儀容は又品性の威嚴にも關する。威嚴と言ふものは實に不思議なもので人は之を見ると直に畏敬服従するが其實品性が之が原因であることを知らねばならぬ。何となれば威嚴即ち人を敬服せしむる道德的權勢を與ふるものは嚴重なる言葉でもなければ、激甚なる怒言でもなく、嚴酷なる賞罰でもなければ、該博なる學識でもなく、さりとして光輝ある德行でもない。威嚴は眞面目で、公平で、嚴肅で、恒久的で、決意的で、其人が人物であり品性を備ふると感知する所より出で来るものである。然るに人の威嚴を失墜せしむるものは何であるか、其の社會的權勢を烏有に歸する所のものは何であるかと云ふに、そ

れは其の人が世に顯はれぬので、誰も之を尊重する者が無い爲か、或は何か可笑しい事が出来た爲かなので、何れにしても品性が劣つて居る爲に然うなるものである。然らば品性が此の如く失墜するのは何の爲であるかと云ふに、儀容が之を危うくし、若くは之を害ふが爲と云はねばならぬ。若も尙一層自重の精神と品位とがあつたならば、此の如く人格なき者の如くに視做されなかつたであらう。若し其の舉動が野鄙で、陋劣で、其の地位に釣合はぬことがなかつたならば、決して輕侮を買ふやうなこともなかつたであらう。若も自分の缺點を矯正し可笑しい所を改めたならば、前後左右の者の笑草となるやうなことがなくして、其の特質美點は全然留存して居つたであらうと思はれる。

由是觀之、品性の修養に就ては何事をも等閑に附し去るべきものではない。如何なる美しき體格でも之に襤褸を着せて、風采を害はぬものなきが如く、如何に立派な品性でも、之に社交的權勢を保たしめんには、儀容の裝飾を必要と

せぬものはない。

第四章 品性の始源

余は品性の理想を描くに當りて、一種の典型となるものを讀者の觀覽に供したのであるが、今や讀者は余の提供したる典型に従つて其の心性を修養する義務がある。謂ふ勿れ、理想が餘り高尚に過ぎて、逆も此の如き完全の域に到達することは出来ない。何となれば其の義務と云ふのは、道德の最高點を必ず現實にしなければならぬと云ふに在らずして、成る可く之に接近するやうに毎日勉め勵むと云ふことである。或は其の資性の弱きを掲げて口實にしてもいけない。何となれば如何程稟性に缺點があつても、余の畫した道に従つて進境することが出来ぬと云ふやうな氣質は一ツもない。良心の潔直なる、意志の强健なる、心の仁愛なる、儀容の嚴正なる等は、是れ皆原始的德行にして、年齢身分及氣質の如何を問はず、凡ての人々の行ひ得可き筈のものである。

然れども此の職責に對しては人々の性質に甚しき不同がある。心田の土に根帯を固めて居る傾癖の善惡に依りて、此の道義的職責を盡すに大なる資けとなることもあり、又大なる妨となることもある。故に人によつて難易の別があつて、或人は殆ど勞せずして理想に向上する品性を有つて居る者もあり、或人は激烈なる心戰を経て漸く進境する者もある。

加^{しかのみならず}梅性質の別によつて之を利導する方法も自ら異にして居る。音樂合奏の時同一の旋律が總ての樂器を以て共に奏せられなければならなくても、各樂器が夫々特別の規則に従て奏せらるゝ如く、余の前章に述べた萬人共通の理想に向つて努力する時にも、各氣質夫々己の傾向適才に應じて之を取扱つて行かねばならぬ。

是を以て各人の性質力量及難易を究むるの必要が出て来る。是迄は吾人の品性より如何なる調和的音樂が出て来るかを述べたのであるが、是より吾人は如何なる樂器を所持して居るか、又如何にして之を奏すべ

きかを研究して見なければならぬ。

乃で品性を構成するには三種の力が與つて大に資けとなるのである。血統と教育と意志即ち是である。此の三者の資の良否によつて、品性の氣稟に善惡の別が生じて来るのである。

(一) 血統の寄與

人の子の初めて世に生れ落るや、宛も母木より切り取られたる挿木に類して居る。嘗に普通一般なる生命を世に齎らして来るのみならず、最早決定して居る生命を齎らして生れて来る。其の世に生れ出でたと云ふ一事の爲に彼は既に祖先の特徴を帶び、終生消磨せざる印章を刻して居るのである。葡萄畑からは葡萄の木ばかり生へるが如く、人間の家庭に於ても其の種族特有の品性は子々孫々に傳承するのである。プフォン^{プフォン}の曰ふには『惡性にして逸走し易く、驕傲なる馬は同じ性質の馬を生ず』と、モードレー^{モードレー}は人に就て同

じ言を語つて曰く『人には其の先祖の決定したる運命ありて、何人が如何様に之を試して見ても、其の稟賦の壓制を脱することは出来ぬ。教育の力は如何に大なるものとしても、嚴密に言へば、未だ制限せられて居る所の一種の力に過ぎぬ。即ち各個人の性質に附隨したる力量器局に制限せられ、又先在的宿命によりて多少局限せられたる圏内に於てのみ其の働きを爲すことの出来るものであるとモンテーニユも、人は血統によりて、全然刈除することの出来ぬ傾癖を稟けて來ることを看取して曰ふには『教育に助長せられて、強堅となることを得れども變性し又は矯正せらるゝことは難し。今の時代に於て教育の力によりて或は徳に移り、或は非徳に奔る人千を以て數ふれども、原始的性質は之を除去すること能はず、單だ之を蔽ひ、之を隠すに過ぎず』と。子は親の生命を受繼ぎて、其の不徳をも、其の美質をも繼承するものである。恒久不變の正義によりて先祖の罪業は其の子孫の負擔となるものである。獨逸の道學者的醫師の言に『天然は吾之を隱密なる裁判所なりと敢言せむ。

其の裁判權は持久的且つ不可見的にして、何等をも逸する所なく、人の目に見えず、世の法律の到達せざる罪過をも知悉す。其の判決は第一原理より出るものゝ如く、至上永久にして、後世子孫に不可避的効果を及ぼすものなり。後昆にして己が苦患の不可解なるを考察して得ざる者も、其の原因を探れば其の先祖の罪惡の中に認むるを得べし』と。(フオイヒテルスレーペン著「精神の衛生」)

生命を人に傳ふる血液は、恰も山の絶頂より降り、遠く土中を流れて、遂に溪谷に落つる水に類して居る。水は土中を流れつゝ、其の過ぐる所の各種の土地より種々の成分を取り、其地を出るに當りては、其の組織分子の中に今迄流過して居た所の一切の土地の痕跡を明に示すものである。時としては其中に最も主なる性質を特に著しく顯はすことがある、例へば時に含鐵成分の勝つて居るものもあり、時に亞爾加里若くは硫黃の成分を多く含んで居ることもある。之と同じく吾々の脈管を流るゝ生命の川も、其の吾人の代に至るま

で経過し來たれる代々の臭味を帯びて、中には善いものもあり、或は悪いものもある。此等過去の多様に影響を與ふるもの、中には時として最も主なる勢力を握つて居るものがあつて、此が吾等の特性となり、氣質の主なる徴候を見出すことがある。然れども其の全體の上に於ては其の組織は甚複雑して丁度其の始源の雜多なるが如くである。

過去の經歷の如何に拘らず、吾々を活かしつゝある血には貧富純駁の別あること瞭かである。隨て之に濕さるゝ肉にも健病強弱の差別がある。此の健全態のものは道德的生命に影響する所尠くない、何となれば細胞の組立が健強であるときには、大に資力に富んで居るけれども、虚弱なるときには、最早仕方がなくなつて了ふ。如何にも人の意志と云ふものは其の身體の狀態に關する所多きを知らぬ者はないが、然し體質の遺傳は其の強弱の度のみに限るものでない。人の肉體には其の傾癖までも根ざして居る。活ける纖維の適能なるは過去に係つて居ること、猶纖維其物の之に係れるがごとくである。

惡根より邪癖のある肉體が生じ、善根より良傾向の肉體が出て來るのは、自然の道理である。

是故に善き系統を引いて居る人々は實に幸福である。地上の寶を相續すると否ざるとは多く關する所でない、何れにしても屹度富める相續人となるに相違ない。彼は其の搖籃の時より先天的に健全を持する約束があり、父祖の徳を種子の裡に包んで居るものである。其の本能的要求は年と共に煥發して自然に之を善の方面に向はしめるであらう。若も太初の世に罪惡てうものが人類の中に侵入して、原始時代より天の設定した道義的健康態の珍らしき平均を打破らなかつたならば、世界萬民の運命は實に此の如く幸福であつたのであらうが、不幸にして原人の罪の爲に、今や生れながらにして混濁せる血統を引かぬ者は世に一人もないのである。

右に反して惡系統を引いて居る人々は實に憫然に堪へぬ者である。其の幼少の時に幸運にして財産等を悉く受繼いで、其の將來は尙憫む可きもの

と謂はねばならぬ。自分の身が若くは子孫の身が頓て父祖の犯したる大悪の虜となつて了ふであらう。何となれば其の邪癖は、若も早く氣が附て之に強き轡を嵌めなければ、必ず其人を驅つて没倫の深淵に沈めて了ふであらう。是故に人は各々其の生るゝ時早や既に其の命運を異にして居る。宛も自身前世に生存して居つたかの如く、自分の一生の上に、先祖の生命を傳承現表して居るのである。或人は生れながら善に向つて飛躍しつゝ、美大なる品性の理想に容易く進境し、或人は之に引き換へて、性來孱弱の身を以て人生の競争場裡に生れ出で、足重くして歩行に堪へず、爲に途中に遲滞しなければならぬ非運に遭遇するのである。

人に自重の精神と責任の觀念とを保たしむるには、上述の感想ほど適切なものはない。何となれば此の如き事實に接するときには、誰でも斯く語る可き筈である。『吾は吾身に於て吾種族の將來を擔つて居る。吾善行は積年累代吾子孫の家督となつて傳はり、永久他人の手には渡らぬであらう。若し之

に反して吾生命にして罪に感染したならば、吾生命より出る子々孫々の生命も其の罪業を受け、彼等は天に向つて、其の失墜の原因は我にありとして訴ふるであらう。』

斯の如く現在の徳行を修めて以て將來の計をなさんとする希望は根據ある事であつて、此の事たるや人が其の種族の過去の惡業を少くとも一半は避けたいと思へば避けられる權を保つて居ることに徴して愈々明かに分るのである。何となれば人が生れながらに受け得たる所は其身の一切を盡して居ると云ふ譯ではない、尙他に教育と意志と云ふ二種の力があつて、遺傳と戦ひつゝ、其の結果を平均にするのである。

(二) 教育の寄與

『如何なる手段を取るも、人の心は初め天性の之を傾けたる方面に必ず傾く可しと確認せよ』とはロツクの言であるが、此言は嚴密なる意味に解すると

きは遺傳の品性に對する寄與を餘り誇大に言ひ過ぎたものと謂はねばならぬ。是を以てサミュエル、スマイルズの炯眼なる觀察によりて之を適中の位置に据直さなければならぬ。曰く『品性は多少各個人に係る幾多微小なる境遇によりて養成せらるゝものなり。之を善なり、惡なりに規畫せざる日は一日もなし。如何に微小なりと思はるゝ行爲と雖、結果の系統を引かざるものは一つもなし、宛も頭上一髪と雖、其の影を投射せざるなきが如し。一行、一思、一情皆吾人の氣象、習性及智識を養成するに資するものなり。』

此言によれば人は如何なる程度まで屈伸自在、鍛鍊自由なる者なるかを明に知り得べし。何となれば遺傳によりて一種の方向を指示せらるゝけれども、未だ之が爲に決定せられた譯でもなく、又之が爲に終結せられた譯でもない。

此世には十分に出來上つたものは一つもない、何物も皆將來何かに成らうと云ふ状態に在て始終動いて居るものである。吾人の足の下に動かすに居

る石塊の如きも、緩徐ながら外物の衝動を受けて其の状態を變更する。況や生物にして外來の影響に感じ易き可塑性のものは、尙更其の生育する所の境遇の印象を受く可き筈である。全く其性を變ずるとは云はれぬけれども、其の養成せられた條件に適應するものである。蒙院師の術は教育家のそれと同じく、生物の型像は變遷變化せしむることが出來ると云ふ事實より割出したものである。

可變性は亦是れ吾々人間の特性の一であると謂はなければならぬ。人は其の機官に於ても亦其の能力に於ても、其が生息して居る境遇によつて作爲せらるゝものである。天性は單だ下書だけしたやうなもので、餘は一生の間其の接觸する外來の影響に委せられて居る。實を言へば、始終養成の道中に在りて、如何なる日と雖、前の日と全く同じと云ふことはない。影響を與ふる物は様々にして、其の新陳代謝する時に當りては、往々前者と後者と衝突する所多きが故に、其の爲に千變萬化するると云ふ有様で、一條の直線を辿らずして

奇々怪々なる振動をなしつゝ、或は進歩する時もあれば、或は又退歩する時もあるのである。然し長い道中の間には、其中の或者が勝を制して、遂に人の特性となるやうになつて了ふ。

人が遺傳によつて得た所のものは、境遇の事情が工作を施す材料のやうなものである。人は血統によつて其の先祖より受け得たる傾癖通能を齎らして來るが、それは未墾の林野に於ける榛莽荆棘の如く蓬々として叢生して居る。然るに四圍の力は其の有意たると無意たるとに拘らず、宛も庭園に植木屋の來るが如く遣つて來て、其の生來の傾癖を或は抜き、或は切るのである。勿論其の發達を助くる所のものも其中にあるけれども、其の機官の内に種子として含まれて居らぬ習癖を播種することは中々容易に出來ない。

此の複雑せる作用の外界の力によつて行はるゝ所のものを名けて、吾人は之を教育と云ふのである。故に此の如く廣き意味に解するときは、教育とは自然の劃せし第一事業を改變する力であるから、品性の修養には著しき寄與

をなすものである。

教育には無意識的働因と有意識的働因とあつて、前者を境遇と云ひ、後者を教育家と云ふ。

人は如何なる年齢の時にも、就中幼少の時には其の機官にも亦た其の能力にも、物界の境遇の影響を受ける。即ち人の依つて以て生息する所の氣候空氣食物是である。兒童は田舎に成長するときは健康にして、都會の窒息すべき空氣の中に育つときは、病弱であることは、誰も知らぬ者はない。山國の人は活氣を帯びて、平地の人は軟弱に傾いて居る。海岸の鋭き空氣は大陸の鈍き空氣よりも尙一層刺激を與ふるものである。南方の人は日當りが好いから脈管に血が躍つて快活であるが、北方の人は感覺が固定して、自在なる飛躍が出來ない。狹隘なる室に成長して、光もなく、空氣もなく、粗食して營養不十分なる子供ほど可哀相なものはない。之に反して新鮮なる空氣、光、食物及活潑なる遊戯の缺けて居らぬ者は健全なる身體組織になつて居る。不健全な

る工場には女子供の衰弱して居る者幾人あるか分らぬ。空氣の腐敗して居る教場に閉籠つて、少壯の年に堪へられぬ幽閉を受け、不愉快を感ずる爲めに不規律になつて居る學生幾許あるか知れぬ。不健康なる境遇の作用が長引くときは身體に傷痕を印して中々容易に消えるものでない。之に引き換へて適宜の時に身體組織を強壯にする境遇に立つときは、氣質をも品性をも改造するやうなものである。チンダルの曰ふには『余は年々アルプス山中に來つて生命の洗濯をなし、心身の平均を回復す』と。

道徳的事情の作用も亦人の性癖に對して大なる働を爲すものである。多年經驗の餘に成れる古き諺は之が効果を示して曰く『汝の交る人を語れ、我れ汝の人と爲り如何を語らむ』と。注意の行届いて恩愛の情深き父母に育てられるときは、兒童の心は打解けて人に對する信用も情愛も深くなるが、家庭の味を知らぬとか、又は放棄若くは虐待せらるゝときは、臆病で、逃げ易く、驚き易く、感じ易くなる。若し餘り嚴重なる規律を以て之を壓迫すれば、縮つて

了ふし若し又之を其意の儘に任せるならば、放慢で我儘になつて了ふ。賢明なる指導者の下に立つて、何等の傷害をも受けず、幸福に成長することの出来る境遇にあるならば、其心開け、其の意志堅固になる。若し唯の獨子で掌中の玉と愛でいつくしまるときは、利己者流になつて了ふ。之に反して兄弟や朋友が澤山あつて、毎日何か不足を忍ばねばならぬことあれば、廉潔と慈愛とを覺えるやうになる。兒童が勤勞の中に育つと、遊惰の中に育つと、又喜悅の中に育つと、悲哀の中に育つと、又美徳の手本の下に育つと、惡徳の空氣の中に育つとに因つて、著しき相違が出て來るので、兒童は情ないとは其の道徳的境遇と全く調子を合はすものである。然して此等の事情が永續すればするほど、傾癖は一層根ざすやうになる。

知識的の境遇も亦之に劣らぬ影響を及ぼすものである。其の精神の稟性的價值が如何様であつても、兒童は其の呼吸する知的空氣如何によつて發達するものである。凡庸の境遇に在り、父母若くは教師の話がつまらぬことの

みで、思想を起す動機ともならず、加ふるに書物の讀む可きものもないとしたならば、兒童の精神は開發せず、省察することも尠く、平凡な者となつて了ふ。之に反して幼少より學識ある者の社會に擁せられ、會話も書物も皆其の精神を開く資けとなるならば、何となく趣味が附いて來て、探求心が起り、見聞を好み、思索を試みるやうになる。然して境遇に關するものは獨り吾人の知的活動の程度ばかりではない。吾人は吾四圍の者、吾父母、吾教師、吾が愛讀する書物及新聞などの思想をも屹度吞込んで了ふ否、否應なしにそれに化せられて了ふものである。精神と云ふものは奇なるもので、一見甚自由に見えるが、其實此くまで境遇の虜となるものである。

然し此等の影響は偶然の場合に屬するのであるが、其れにも増して教育家の影響感化と云ふものは實に著しいものである。若し教育家にして其の權利を能く自覺し、繼續の精神を以て十分勇健に之を施行するならば、人々の上に就中青年子弟の上に、廣大深甚にして永く持續すべき權勢を及ぼすであらう。

惡癖を除去して、良傾向を發展せしめ、尙進んで良習性をも作ることは實に教育家の任である。若も教育家が一定の案を立て、行ひ、堅忍持久の精神を以て之が實現を期するならば、其の努力は必ず大々の成功の榮冠を戴くに至るであらう。

教育家は、種々の境遇の中に就き、其の最も心身に健全なりとする所のものを選びねばならぬ。若し境遇の方から壓して來るやうなことがあらば、之を善に化するやうに注意せねばならぬ。又外界の事情を利導するのみを以て満足せず、愛の籠もれる温情を以て、賢明なる訓言を以て、又鼓舞獎勵の言動を以て、直接に以心傳心的に感化を及ぼさねばならぬ。

人は此の如く絶えず働きつゝある勢力の作用によるから、全く生れ落ちた儘に繼續して行くと云ふことは、逆も出來ぬものである。其の遺傳によつて受け得た所の品性は、教育の力によつて著しく變化を受けるのである。

(三) 意志の寄與

各個人の意志は人生第三の力にして、遺傳と教育との力に應援をなし品性の養成に尠からぬ力を添へるものである。

世に意志の寄與を疑ふ人あるのは、一方に於ては多くの人々は其心に就て毫も盡瘁せず、其の一生を擧げて天性の本能と境遇場合の作用のみに打任せ置くからで、他方に於ては修養の心ある者すら、豫め期する所の根本的克己法に出ること能はずして終りまで同一の心敵の攻撃を受けつゝ、呻吟して居るからである。

然れども人の良心は飽迄も人は自治的の人間とならねばならぬことを絶叫して居る。吾人にして若し惡癖に敗を取るならば、良心は責を吾人に歸して、吾人を訴へるであらう。又若し吾人にして邪癖を制御して、情慾に反抗するならば、良心は吾人を以て善道の元首として稱讃するであらう。吾人の心

は吾人の手の中に在るものだから、吾心を欺く情慾の誘惑を避け、深謀静慮の餘に出でたる劃策を廻らして、屢々狂奔する意馬心猿を御するのは、吾等の權内に在ることを確認しなければならぬ。

此の確認は經驗によつても確證せられて居る。己に克つことが出來ると云ふ希望は決して空幻的のものではない、何となれば古來幾多の人物が實際之を行つたのである。世間に於ても亦宗教上の修道院に於ても、天性を全く滅却せず、吾之に傷害をも加へずして、單に之を征服した偉人は澤山ある。惡癖を制御して、悍馬の如き勢力を善道に向け、芽生さへも能く認められなかつた習性をも發達せしめた人々は幾許あるか分らぬ。設令克己の人傑、自主的偉人が稀であるとしても、之を試さんと決したる人々の成功したのを見れば、意思の力の疑ふ可からざるを知るに十分である。

品性修養の事業に於ける各個人の寄與は實に大切なもので、畢竟之が爲には凡ての功を己に收めることが出來るのである。人は如何に良系統を引い

て居つても尙且惡癖を有つて居るもので、之を其儘に打棄て、置く日には、漸次増長して優勢を占め、遂には最善の心性をも呑噬するに至るの患憂あるものである。如何に前後左右の者が善くても、亦如何に教育の影響が深く及ぼされても、各個人の自働的盡力ほどに及ぶものはない、又誰でも其の性行を律する義務を免除せらるゝものではない。幸運なる境遇に居る人でも、自ら放心不注意に流れて居るが爲めに折角の教育の効を空しく水泡に歸して丁ふ例は、殆ど毎日のやうに見受けぬであらうか。

但だ此舉に於ては剛勇なると同時に、謙抑たらんことに注意しなければならぬ。天性を破滅してはならぬ。天性生れ落ちた儘に又教育家の手に鍛へられた儘にして置いて、單た己の心を失はず、自主的精神を以て自ら支配することの出来るやうに務めなければならぬ。

人は各々其の所持して居る樂器を奏する者で、或人はヴァイオリンを奏し、或人はクラリネットを吹き、或人は又ホルネットを吹奏すると云ふやうに、各

自其の受け得たる樂器は之を變更しない、又人の樂器を羨望するやうな心をも起さぬ、但だ自分の樂器の調子を合せ、巧妙に之を奏して、高尚なる理想を顯はすことを務むるものである。大家の妙手の下には、如何に粗末なる樂器と雖、天籟の妙音を出さぬものはない。

第五章 品性の分類

品性の出で来る始源は極めて複雑して居るから、相互に類する點の少いのを理解するは容易なことである。先づ第一に血統によつて違つて居る、何となれば遺傳を受くる才能の有無は兄弟の間に於てすら各々異つて居る。次に其の相違の點は教育の力によつて益々著しくなる。此の教育の力は境遇と教育者との一々違ふやうにまた違ふものである。若夫れ意志の効果に至つては尙更に異つて居る。何となれば下は柔弱にして其の本能の傾く儘に従つて行く人より、上は決然として其の傾癖を矯正せむと努むる人に至るまで強弱の程度は實に種々様々で、幾級にも分れて居る。是を以て人の數ほど品性の種類があると言つても差支ない。

若も人の數ほど品性の種類があるとすれば、一々之を分類することが出来やうか。無論多少人工的でない分類法を立てることは困難であると云

はねばならぬ。然し此の如き困難は品性に限つた譯のものでない、天然物を分類しやうと思ふ度毎に出で来るものである。何となれば天然は各個の事物以外には何も造らぬもので、分類は便法として吾人の精神裡に於てのみ作らるゝものである。世人が深林に通路を劃して、其道を認め、其道を通り易からしむる如く、博物學者も分類法と云ふものを設けて、各個物の繁茂せる世界に通路を開かんとするのである。

此の如き次第なるが故に、古來品性に就て論じたる學者達が、何故種々様々な分類法を立てたものであるかが分る。余も亦先輩の説きたるものゝ中に就て、其の最も簡易にして又最も明快なるものを選定して差支ないと思ふ。何となれば品性の迷路の嚮導者としては、讀者の歩を最も明に照らす者を選ぶのが當然である。

分類法は出發點によつて種々に違つて来るものである。或者は氣質を以て基礎となし、或者は精神の能力を以て基礎となし、或者は又精神の能力と氣

質との混合を以て基礎とする。余は今茲に博學を銜ふ意はないから、此等幾多の分類法を悉く黙々に附し去る積である。

乃で余の述べやうとする分類法は氣質を基礎とするものである。氣質とは人の體質を指すのである。又遺傳によつて受得し、境遇によつて多少改變せられたる傾癖の總體を指すのである。此點に於ては余は鋭敏なる觀察をなしたる古人を則とし、中世の時分より今日に至るまで著名なる心理學者間に繼承されたる傳統に據る積である。實際世には體質の重要なを認めぬ者はあるまい。先づ第一に人と爲り如何を顯はすものは、體質である。精神の能力の優劣及び價值を定むるものも亦體質である。次に品性の修養上殆んど意志を運用せざる者如何に多數なるかを見れば、多くの人々に於ては其の道德上の組織即ち品性は氣質に含まれて居る所の要素と傾癖とに歸すると斷言して然るべきである。

此の原則に基くときは四種の根本的氣質より四種の標本的品性が出て來

る。多血質、神經質、短氣質、冷靜質の品性即ち是である。

實際は此の四種の氣質の中孰れにしても他の氣質を全く混ぜずして純粹なるものは一つもない。即ち純乎たる多血質、純乎たる神經質、純乎たる冷靜質のものは見受けられぬ。隨て何人も余の左に描かんとする畫像に全然似て居ると云ふやうな者はあるまいが、然し其の各種の雛形の中には已に類する所の特色を認むることが出来るであらう。是れは何の爲であるかと云ふに、實際活きて居る人々に於ては標本的品性が多少混合して居る、但だ其の程度が各々違つて居るのである。即ち特殊の徴候を帯びて居らぬ所の平均の品性より極めて著しき徴候を有つて居る所の極端の品性に至るまで、凡ての種類標本的品性が見受けられる。

(一) 多血質の品性

多血質の人は常に顔色薄赤くして、眼は青く髪は茶褐色である。多血質の

人の血は淋巴質のに勝つて居るから、強健なる心臓の鼓動によつて、廣き脈管から、體中に逆射せられ、急速に循環して、到る處に活氣と快氣とを蒔き、年と共に漸次肥滿して來る。蓋し多血質の人は消費する所尠くして、貯蓄の性を帯びて居るが故に、血には深紅の色を與へ、皮膚には透明の光澤を附し、顔色は新鮮の容貌を保たしむるものである。

其の凡ての能力を働かしむるに當りては神速輕快にして屢々變り易い。其の感性は鋭敏激烈なれども、繼續しない。印象を受くること深くないから、忽にして笑ひ、忽にして泣き、喜んで居るかと思ふと直ぐに悲む。慟哭に沈んで居りながらも、何か一寸可笑いことでも見ると、忽ち哄然大笑する。盛宴を張り歡聲洋洋たる裡にも、何か可哀相な者に接すると直に憫情を催して涙を流す。難苦には極めて感觸し易く、些少の失禮をも痛く感じ、苦感堪へ難しと云ふやうなことに頻次なれども、其の苦しき印象は忽ち消え、隨て人を恕すことも亦容易である。

其の心は本能的に境遇場合に應じて動き、瑣細なものに接觸しても直ぐに感じ、愛情に接すれば心開いて自ら之に赴き、否、熱情を以て之に奔り、戀々として之に愛着するのである。友愛は、其の繼續して居る間は、甚だ濃厚にして、擴張的で且つ赤誠的である。多血質の人は愛に深く傾いて居るから、情熱の人と稱せられて居る。是は頗る適切の稱である。然し持久の精神を缺いて居る爲に、忽ち其の目的物を變へて了ふ。今日此人に赤誠を誓ひたりと思ふや、明日は早や之を他の人に誓ふ。『眼を逸すれば、心を逸す』と云ふ諺があるが、善く多血質の心事を穿つた語である。

其の智識は活潑な性質である。神速にして、知見すること早く、類化するこゝと早く、加ふるに記憶も強く、想像も熱い。其の智識は銳利なる尖鋒の如く、如何なる問題にも容易く入込む。多血質の人は鋭敏であるだけ、それだけ雄大であり、知覺の容易であるだけ、それだけ勤務に忍耐であるなれば、随分優れた人物となるに相違ない。惜いかな、勤勉を缺き、業を怠り、學を疎にし、胸中に

蓄積がない故に堅實の性なくして、輕きこと火焰の如くである。詩人となることは出来る、又時に辯士とも成れるが、然し學者にはなれない。されども其の輕佻の才能は時々成功することがある。熱實なるときは、人を感動せしめ人を煽動することもある。願くは此等の事業が偏へに善の方面に向はしめて欲しいものである。

其の品性は或方面より見て頗る愛らしい。多血質の人は愉快なる生を送り、喜色顔面に見はれ、人と接する毎に快談百出、友と相語るときなどは、諧謔願を解かしめ、忙はしく、騒々しく、運動を好み、宴會を喜び、笑聲の四隣に響くを聞いて、人は直に其人と推する、何となれば一座の中で其聲が常に衆人の聲を壓して居る。成程輕佻浮薄にして、前後の考もなく、倨傲自負にして馬鹿らしく名聲をよろこぶ風があり、義侠心を現はすときには浪費を顧みざるまでに至るが、然し人は何事も容易く恕して置く、何となれば無邪氣な子供の様で、世話好きで、無慾であると誰でも知つて居る。

多血質の人に缺けて居る所のものは意志である、即ち決意の確かなる性を缺いて居る。何となれば善に向つて大飛躍をなし、演説に感じて涙を流し、斷然決心して聖人とならんことを誓ふことあるけれども、持久的努力を缺如して居るから、皆畫餅に歸して丁ふ、此人の不幸は凡て茲に在るのである。多血質の人は誘惑に接するときは、支へることを知らぬ。惡癖を除去して、良習を其の心田に植ゑんが爲に、十分持久的決意を以て努力することを好まぬ。是を以て情慾に溺れ易く、重大な慾でなければ、少くとも飲食の慾に捕はれ易い。感覺は彼に取りては他人に於けるよりも危険である、彼は之を制御する轡を有つて居らぬ。

若し多血質の人が自ら制して己の性行を支配するに至るならば、大に有爲の人物となるであらう。何となれば利己心がないからいざと云ふ場合には、何事をも考へずに、己の身命をも獻げて丁ふ、其の熱心、其の仁心は、實に感佩すべく、敬服すべきである。然し此等の美質をして價值あらしめんには、二つの

者が最も必要である。即ち規律的生活と忠實なる朋友是である。前者は常に其の動搖せる意志を確立せしめ、後者は之が指導者となり、動もすれば其の方針の謬り易きを穩に正道に回復せしむるものである。

(二) 神經質の品性

神經質の人は古人之を膽液症の人若くは鬱憂性の人と稱した。其譯は何となく沈鬱に傾き易き性質であるからである。此の氣質の人は神經組織が他の機關組織に勝つて居るから、それが著しく目立つのである。神經が餘り過敏で、筋肉の發達が十分でないから、活動と云ふ方よりも寧ろ多感と云ふべき方である。誰の目にも血に乏しいやうに思はれ、血液の循環が宜しくない。顔色は蒼然として、眼と頭髮のみが光澤を帯びて居る。睡眠が不足勝にて且不規律であるから、毫も疲勞を慰することが出來ない。筋骨の逞しからざるが爲に、自ら活動すること叶はぬが、然し人の獎勵鼓舞の下には、其の活動が熱

狂して激烈を極める。其の顔面の状は卵形である、何となれば頭腦の發達が其の額を廣くして頤を細くして了ふ。體中の働きが微弱なるが故に、血の色は動脈にも靜脈にも殆ど同じ赤味を帯びて居る。體格は瘦せてスラリとして、透明質のやうに思はれる。營養は不十分にして且つ不規律である。

神經質の者は人によるこばれる質である。優し味を帯びて、往々紳士の風ある者がある。然し痛苦に感じ易い。

其の感情は多血質の人の如く過敏でないけれども、其の代りに尙一層深甚である。多血質の人は小衝突にも直に激して湯の沸騰するが如くなれども、神經質の人は寧ろ冷靜にして之に感ぜざるやうに見える。

然し神經質の人は印象を受くことが深く、其の印象は深く心の底まで透徹し、それが爲に創痕を受ける。多血質の人は侮辱を烈火の如く排斥して、激しき舉動を示すけれども、神經質の人は之を排斥せずして、却て之を收容し、其の爲に閉ぢかゝつた疵口に矢が再び衝立つやうな苦みを感じる。

其の智識は凡そ他の氣質に於けるが如く人によつて變つて居る。然し通常は鋭敏犀利にして、思想を心の奥底に練るから、頗る強健にして創作的の考を起し、尙之を言顯はす語句の如きも精確にして、警句が多い。有名なるパスカルカルの如きも此の性質であつた。然し智識的の働は疲勞し易いから、屢々中止しなければならぬ、但だ之を繼續するときには、同一の道を進んで行くの便がある。神經質の人は美の觀念を有つて居つて、殆ど天稟に出るが如くである。彼は美術を好み之に對して趣味を持つて居る。彼れ若し之を修練するならば、大に秀越することが出来る。

神經質の人は健全なる状態に在るときは、其の心情に缺けて居ると云はれるやうな所はない。往々は其心温かに、優しく、深く、且忠實である。愛情を脱却することが中々六箇敷い、何となれば其心に印象が深く根ざして居るが爲である。彼は歡びの感よりも苦みの感が強い。其故如何と云ふに、或は自分の盡して遣つた丈け、人が難有く思つて居らぬと感じて、其の忘恩の沙汰を氣

に懸け、或は臆病又は下手の爲に、自分の感じて居る所を十分に言顯はすことが出来ず、默然として無言で居るのを非常に苦しく思ふのである。是れは打解けた擴張的の性質の者でない爲である。彼は多血質の人の如く、心を自由自在にすることが出来ず、之を深く藏して居る。丁度輕少の寒風に當りて直ぐ萎む花のやうな有様で、氣を塞ぎ、心を締め、身を潜めて、直ぐに青冷めて了ふ。其時には利己的態度のやうに見えるけれども、實際は然うでない。何となれば場合によりては、就中病人の枕頭に立つやうな時などには、忠誠を盡して中高徳壯舉に出ることがある。

其の意志は薄弱と云はんより、寧ろ中絶的と謂ふべきである。何となれば神經家の意志は其の體力の水平に準じて居る。即ち勞力若くは心配などによりて疲れ果つるときは、意氣阻喪して何事も爲す能はざるに至るものであるが、血液が滾々として脈管に迸るとき若くは中心愉快に堪へざるときは、意氣勇健剛邁にして天下何事か成らざらんと云ふ概がある。隨て品性も種々

に變り順境には愛らしく、情深く、人を信ずるの心厚く、愉快の氣溢るゝ程であるが、逆境には猜疑心を起し、感じ易く、怖氣が付き、何となく反對したくなり、厭世的觀念を起して、意氣全く銷沈して了ふ。

神經家の特質は變り易い心である。珍らしい器械でありながら、調子のくろい易いやうなものである。疲勞の時は、是れは頻次あることであるが、失望落膽して、非常の心配をなすものである。善を嘉して、其の責を盡さんとするけれども、力弱くして之を實行することが出来ぬと思ひ、殆ど絶對的に自信力を放棄することがある。努力を要する場合に臨むときには、宛も深淵にでも臨むが如き、惴々焉として恐れ、爲に氣力を喪失して了ふことがある。自分の意志の通りに體力も亦弱過ぎると思ひ、一寸の不快でも、大患の如き感をなし、其の遠き先きへの結果をまで慮り、想像で病を作り、それを非常に苦んで居るのである。人に對する猜疑心も亦鬱憂症を増し、之が爲に段々衰弱して來る。對手の失念の爲めに起つた事、又はつまらぬ話、若くは無頓着の處置に接

するときは、之を非常に重く解る。何氣なく氣に障るやうなことをした人をも、迫害者が刑吏のやうに思ふのである。譯もなき反情に驅らるゝときは、其の嫌ふ所の人を見ることをも、其の話を聞くことをも、厭に思ひ、其人の姿が何となく身に附纏つて居るやうに考へ、幻想拂へども去り難きやうな心持になる。此の如き心的錯亂は、若も時々氣を散じなければ、狂氣となるに至ることがある。

神經家の危険は感覺の方面にはない。何となれば、大抵始終冷靜にして往は甚だ純潔である。凡ての患は意志の方面より來るものにして、其の意志が屢々消失し去り、時としては其の消失の期間が甚だ長引くことがある。其間心的生命は或は中絶し、或は逸失して了ふ。若も其の喪失及其の悲痛を以て是れは單だ身體組織の然らしむる所に過ぎずと自覺するに至るならば、彼の病は半分だけは快癒したと謂つてよからう。彼は又故さらに病を重からしむるやうな刺激を作ることや、又は考の害になるやうな偏僻の心を起すこ

其の智識は凡そ他の氣質に於けるが如く人によつて變つて居る。然し通常は鋭敏犀利にして、思想を心の奥底に練るから、頗る強健にして、創作的の考を起し、尙之を言顯はす語句の如きも精確にして、警句が多い。有名なるパスカルパスカルの如きも此の性質であつた。然し智識的の働は疲勞し易いから、屢々中止しなければならぬ、但だ之を繼續するときには、同一の道を進んで行くの便がある。神經質の人は美の觀念を有つて居つて、殆ど天稟に出るが如くである。彼は美術を好み之に對して趣味を持つて居る。彼れ若し之を修練するならば、大に秀越することが出来る。

神經質の人は健全なる状態に在るときは、其の心情に缺けて居ると云はれるやうな所はない。往々は其心温かに、優しく、深く、且忠實である。愛情を脱却することが中々六箇敷い、何となれば其心に印象が深く根ざして居るが爲である。彼は歡びの感よりも苦みの感が強い。其故如何と云ふに、或は自分の盡して遣つた丈、人が難有く思つて居らぬと感じて、其の忘恩の沙汰を氣

に懸け、或は臆病又は下手の爲に、自分の感じて居る所を十分に言顯はすことが出来ず、默然として無言で居るのを非常に苦しく思ふのである。是れは打解けた擴張的の性質の者でない爲である。彼は多血質の人の如く、心を自由自在にすることが出来ず、之を深く藏して居る。丁度輕少の寒風に當りて直ぐ萎む花のやうな有様で、氣を塞ぎ、心を締め、身を潜めて、直ぐに青冷めて了ふ。其時には利己的態度のやうに見えるけれども、實際は然うでない。何となれば、場合によりては、就中病人の枕頭に立つやうな時などには、忠誠を盡して中高徳壯舉に出ることがある。

其の意志は薄弱と云はんより、寧ろ中絶的と謂ふべきである。何となれば、神經家の意志は其の體力の水平に準じて居る。即ち勞力若くは心配などによりて疲れ果つるときは、意氣阻喪して何事も爲す能はざるに至るものであるが、血液が滾々として脈管に迸るとき若くは中心愉快に堪へざるときは、意氣勇健剛邁にして天下何事か成らざらんと云ふ概がある。隨て品性も種々

に變り、順境には愛らしく、情深く、人を信ずるの心厚く、愉快の氣溢るゝ程であるが、逆境には猜疑心を起し、感じ易く、怖氣が付き、何となく反對したくなり、厭世的觀念を起して、意氣全く銷沈して了ふ。

神經家の特質は變り易い心である。珍らしい器械でありながら、調子のくろい易いやうなものである。疲勞の時は是れは頻次あることであるが、失望落膽して、非常の心配をなすものである。善を嘉して、其の責を盡さんとするけれども、力弱くして之を實行することが出来ぬと思ひ、殆ど絶對的に自信力を放棄することがある。努力を要する場合に臨むときには、宛も深淵にでも臨むが如き、惴々焉として恐れ、爲に氣力を喪失して了ふことがある。自分の意志の通りに體力も亦弱過ぎると思ひ、一寸の不快でも、大患の如き感をなし、其の遠き先きくの結果をまで慮り、想像で病を作り、それを非常に苦んで居るのである。人に對する猜疑心も亦鬱憂症を増し、之が爲に段々衰弱して來る。對手の失念の爲めに起つた事、又はつまらぬ話、若くは無頓着の處置に接

するときは、之を非常に重く解る。何氣なく氣に障るやうなことをした人も、迫害者が刑吏のやうに思ふのである。譯もなき反情に驅らるゝときは、其の嫌ふ所の人を見ることをも、其の話を聞くことをも厭に思ひ、其人の姿が何となく身に附纏つて居るやうに考へ、幻想拂へども去り難きやうな心持になる。此の如き心的錯亂は、若も時々氣を散じなければ、狂氣となるに至ることがある。

神經家の危険は感覺の方面にはない。何となれば、大抵始終冷靜にして往往は甚だ純潔である。凡ての患は意志の方面より來るものにして、其の意志が屢々消失し去り、時としては其の消失の期間が甚だ長引くことがある。其間心的生命は或は中絶し、或は逸失して了ふ。若も其の喪失及其の悲痛を以て是れは單だ身體組織の然らしむる所に過ぎずと自覺するに至るならば、彼の病は半分だけは快癒したと謂つてよからう。彼は又故さらに病を重からしむるやうな刺戟を作ることや、又は考の害になるやうな偏僻の心を起すこ

とをも避くるであらう。彼は意志の力に乏しいけれども、堪忍を以て靜に休養すれば其の力の回復を待つを得べく、憂鬱の場合には、友人の慰める言をも信ずるに至るべく、兎に角遠からず光明の日が来るであらうと云ふ信頼の心を堅く胸中に蓄へるやうになるに相違ない。

(三) 短氣質の品性

短氣質又は膽液質とも稱し、尚衝動的、熱狂的、若くは、意志的の氣質とも名づることが出来る。其の特徴とする所は、始終何等かを行ひ、何等かに盡す心の要求に迫らるゝことである。宛も高壓の程度に電氣を蓄へて居るやうな有様で、始終何かに發動せんとかゝつてゐる。

血は豊饒充溢して廣き脈管を流通して居る。強力なる筋肉を通過して後體中燃焼の結果黒色となつて靜脈に出て來る。此の排泄物は皮膚の色素膜の裡に沈澱するから顔色の蒼然たるもの褐色に變じ、時としては橄欖の帶緑

黄色に變ずることもある。是れは暖國に於て屢々見る所である。此の膽液の色が此の氣質に名を與へて、膽液質と名けたのであらうと思はれる。何となれば其の薄黒くなつて居る所の皮膚の下に流れて居るやうに思はるゝものは一種の膽液にして決して深紅の血ではない。兩眼又は頭髮も其の纖維の裡に沈澱する色素の爲に黒色又は褐色になつて居る。顔線の著しく尖鋭なるは、多少暴く又嚴しい様子を顯はして居る。精力を盡すこと多き爲に、膽液質の人は瘦せて枯れて居る。若し肥大になつて居つても肥滿の結果ではなくして、寧ろ筋肉の發達して居るが爲である。

此の短氣質の人の感性は纖細でなくして、寧ろ遲鈍の方である。印象は多血質の人に於けるが如く激烈でもなく、神經質の人に於けるが如く深甚にして且持續的でもない。隨て彼は多感的でもなければ、沈鬱的でもない、心中の苦を感じることも比較的に尠い方である。彼は辛抱強く見受けられても、感性の優し味を有つて居ない、又他人の苦痛を感じることも少ない、其人の交際

は鄭寧を缺いて居る。

智識の發現は人によつて種々程度を異にして居る。筋肉の働きの勝つて居る所には、力士が出るけれども、思索家は出ない。此の如き人の精神は肉體に沈溺したるもの、如く鈍くして智識的事業には不適當である。短氣質の人の精神は甚だ纖巧でなくとも亦創作的でなくとも、少くとも蓄積的であるから、博聞強記、學殖豊富である。彼は理論家と云はんよりは寧ろ實行の方面に傾いて居る者で、其の口を開くときにも、亦筆を執るときにも、考へつゝありと云はんより、寧ろ行ひつゝありと云ふ様子である。

短氣質の人は心情を缺いて居ると云ふ譯ではないけれども、温かき情、優しき心及人情などが外に顯はれない。其の喜怒哀樂の情は甚だ勇猛激烈にして之を制御し難く優美なる心の特徴たる温き情、無慾の赤心等之が爲に窒息せられて居る。若し自ら用意警戒しなければ、其の一旦慨然として奮起活動しつゝ事を成さんと欲するに當りては、凡て之を阻害し若くは之を遲滯せし

むるものを悉く排斥し若くは蹂躪して顧みない、其時は實に冷酷無情なる利己主義者の如き觀がある。

短氣質の人には何事かを行はんとする活動の精神が勝つて居る。無爲閑散は其性の忍びざる所である。事を行ふの動機がなくなるときは、自ら之作らんと焦つて居る。故に胸中何等かの畫策がなければ一日も休止することの出来ぬ質である。一たび目的を定めて之に着手するや、目的に向つて歩を進むると謂はんより、寧ろ之に向つて馳奔して行くと謂ふべきである。時日の遲滯するのは待遠で堪らない。此質の人は今日行ふ可き所を決して明日まで延ばささない、寧ろ明日終る可き事を今日にも終らうとして居る。障礙物に接觸するときは、之を排除しなければ止まない。恐怖など、云ふことを知らぬ質である。城壁に向つてまでも直前勇往、直に之を倒さんと努める。若も抵抗する者があれば、憤然として怒り、其勢猛烈にして當る可からず、頑硬にして奈何ともすべからず。若し敗北するやうなことがあれば、永く怨恨を

呑み復讐の日の來らんことを希待して居る。

此の如き氣質の人は若も自ら抑制して精力を利導することを知るならば天下有爲の人物となるに相違ない。如何なる困難の事業でも之に着手して成就しないことはなからう。頑剛堅忍の精神を以て之に従事し、人をも傷けず、大反對をも招かずして着々と勇進邁行するであらう。然し自分の氣質を倒して己に克つことを十分に努めなければ、恰も高熱の程度に沸騰して居る汽罐が、一大速力を以て鐵路を奔つて、之を制止するものなきが如き有様になる。若し之を停止する強勇の力を缺いて居るときは、其の本能に任せて馳突して了ふ。是に於てか過激なる舉動に出でたり、命令的權能を振廻したり、大望野心を起したり、大膽不敵の事を企てたりするやうになる。然して人を遇するに傲然慢侮、時に殘酷に失することもある。此の如き人の面前では、何事も屈しなければ承知せぬ。此の如き人は己の志望を満足せしめ、己の企圖を實現にする事を以て唯一の權利と心得て居る。

此の如き人にして若し余に意見を求むる者あらば、余は次の二忠言を呈せんとする。第一『自ら心を制し、大早計に事を行ふことなく、行ふ前に先づ考へ、輕々に着手する勿れ。』第二『細民に同情を有ち、自ら謙抑して人を壓倒せざらんことを務め、己が優勢を逞うすることなく、己が權利を振廻すこと勿れ。』

(四) 冷靜質の品性

冷靜質の人には、多血質の反對に多痰質又は淋巴質が發達して居る。一見柔弱にしてつまらぬ人の風がある。身體肥えて重く、顔色青白くして頬ふくれ、鼻肉つきて廣く、外見甚だ揚らぬ様子であるけれども、然し仔細に檢査して見なければならぬ。何となれば冷淡無頓着、無定形無感覺にして品性を欲き殆ど一種の肉塊の如くに思はるゝ者の傍には、頗る音調の高くして眞個實力のある人物として顯はるゝ、冷靜質の者もある。余が品性第四の標本とするのは即ち後者を指すのである。

顔面無色、鬚髯疎に、頭髮薄く、眼灰色若くは綠色であり、筋肉の發達鈍く、行動甚だ緩慢と云ふのが即ち是れ冷靜質の人の外貌的特徴である。其の感性は迅速でもなく、精銳でもなく、又深奥でもない。侮辱の矢を受けても深く心に這入らぬから、左程苦感を覺えない。人が失禮をしても平氣で己の感情を害はぬ代りに、鄭重に歡待優遇しても、それ程喜べる色も見えない。智識は大に開發し、多くは明敏であるけれども、想像には富んで居らぬ。其の言辭は潤飾的、情熱的、誘引的と云ふよりも寧ろ明瞭、整齊、正直、堅實の方である。其の學術上の著作の如きも多年研究の餘に出で、苦心慘澹の結果であつて、自家固有の思想の顯はれ出る創作的著作ではない。其の心は善良であるが、見たところ甚だ冷たいやうである。必要ある場合には、獻身的赤誠に出るけれども、多くは自發的でなく、其の心情は始終内に隠れて見はれない、是は其性が偏屈にして外面に煥發し難いからである。其の美質は自己には大に資けになるが、尙人にも廣く其の利益を及ぼしたならば宜からうにと、殘念に思はれる所がある。

活動は矢張冷靜質の人の特徴になつて居るが、然し其の活動は靜穩にして節度がある。短氣質の人の活動は、急湍激流の如く馳奔し、事業を製出すと云はんより、寧ろ物を荒らし易い方であるが、冷靜質の人に於ては、大河の洋々たるに似て、儼しく流れ、何等の損害をも及ぼさずして、時に偉業を完成することがある。短氣質の人に在つては意志を制御する力が往々不十分であるけれども、冷靜質の人に至ては之に反して寧ろ其の支配權が強大に失する位である。是を以て冷靜質の人は用意周到、深謀遠慮であつて、確たる見込が附かなければ事を行はぬ、又妨害物を破却せず、巧に之を他に轉じて進むが故に、誰にも障らずに目的を貫徹することが出来る。然し其の代りに餘り牛歩遅々として機敏に立廻ることが出来ないから、屢々好機會を逸して了ふ。されど細事をも完全に遂行する利便がある、何となれば徐々と進行して、微弱なる精力をも悉く運用するからである。余は冷靜質の人に向つても短氣質の人に

對するが如く『自ら其心を制せよ』と忠告するものである。然し短氣質の人に於ける制御は自ら節制緩和するに在るけれども、冷靜質の人に於ては眠りたる勢力を覺醒せしめて自ら獎勵奮起せんことを希望する。

若も徳と云ふものが喜怒哀樂の激烈なる情を節するに在りとするれば、冷靜質の人は徳を行ふこと甚だ易いと謂はねばならぬ。然し徳は誰に取りても道徳的義務を遂行するに在るものであるから、冷靜質の人に取つても他の性質の人に於けると同じく容易の業ではない。道徳的義務は短氣質の人に向つては『止まれよ、控へよ』と曰ひ、冷靜質の人に向つては『醒めよ、勵めよ、働けよ』と曰ふ。二者孰れも困難であるが、然し困難だけに壯大なる事業である。

冷靜質の人の活動は最高の程度に達するとき甚だ強大である、繼續的に盡瘁して、毫も倦怠の様子が見えない。用意周到と事業雄大と云ふ二個の長所を備へて居る。

中等の程度に在るときは、始終節度に中つて、小心翼翼と云ふ態度である、然し大業を企て、嶄然頭角を顯はすには餘りに力が弱過ぎる。間然する所なき人であるけれども、品性には乏しい。

最低の程度に在つて、殆ど零度に近い時には、人が微弱遊惰緩慢になつて、殆ど行動に出ることさへも不可能になり、其で惰眠を醒起せんとする高尚な命令の言に接しても最早無感覺になつて了ふ。

讀者若し以上の章句中には自分の面影も明に描かれて居るだらうと思ひつゝ、本章を読んだならば是は、大なる謬想であつたと氣が附くであらう。余の描寫したる中には讀者の相貌に酷似して居るものを認められる筈がない。余が本章に描いた所は各種の標本となるものばかりで、隨て極端のものである。然るに實際の人々は之よりも尙一層複雑して居つて、各基礎的標本に特有なる要素を多少調和したる集合物である。

加^{しかのみならず}之寫生と實物とは尙他の區別がある。寫生したものは固定して居るけれども、實際生きて居るものは動いて居る。最初は冷靜質であつても、繁劇なる事務の爲に或は短氣質になるかも知れぬ。今日神經質で惱んで居つても明日恐くは多感質の愉快なる氣象に傾くかも知らぬ。此の如く極端より極端に變り易いから、已むを得ず吾々の繼續的狀態の平均を取つて論ずるより外に道はない。

吾々は此の平均の品性が何れの標本に傾いて行くを好むか。

若し吾々が諸種の品性中一番結構な性質を願望することを許さるゝならば、四種の標本より各々其の長所美點を借り受くるであらう。即ち多血質よりは愉快快活の氣象を取り、神經質より深奥優雅の心情を取り、短氣質よりは活動と硬強とを取り、冷靜質よりは克己、慎重及繼續の精神を取るであらう。

此の願望は行爲の規格ともなるものである。何となれば、吾々の相貌にも在つて欲しいと思ふ所の性狀を選定した上は、最早品性修養の爲に孜々兀々

として勵みつゝ、其の選定した性狀を吾々の相貌に刻み込みさへすれば可いのである。

第六章 品性の修養

若しモンテニユとルーソーの曰ふが如くんば、品性の修養に務むるのは、
常に無用の業であるのみならず、又實に悪い事であると謂はねばなるまい。
何となれば前者の曰ふには『吾人は天然に従はずんばあるべからず、至上の
命は之に適合するに在り、余はソクラットの如く、理性の力を以て天然の氣質
を矯正せざりき』と。後者の曰ふには『造物主の手より出るや、物皆善なり、
人間の手に入るや、物皆悪化す』と。

然しながら此の空想的哲學者の意見は積年の觀察と反對して居る。ラ
リュエールは真相を描寫して曰く『兒童は自負なり、傲慢なり、怒り易く、嫉み
易く、好奇心に驅られ、利害の觀念に支配せられ、怠慢なり、輕躁なり、臆病なり、無
節制なり、虚言者なり、假伴者なり……害を受くるを好まずして、害を加ふるを
愛す、彼等は既に大人おとななり』と。

某心理學者は誇張の言を用ひず尙一層精確に、自己の修養を怠りて天然の
儘に任せて居る人々の道德的狀態を描寫して曰ふには『彼等の品性は雜駁
にして往々相反對する諸種の性質の聯絡なき集合に過ぎず。此等の性質は
相衝突し、相妨げ相助け又相互に平均することあり。其の一生は一定の法則
に従つて論理的に發達するものにあらず、又豫察せられたる行動の必然的系
統にはあらずして、種々の雜駁なる然も往々相連絡せざる行爲の排列に外な
らず』と。

世の經驗に富み、且つ自己の一生をして大に價值あらしめ効果あらしめん
との高尚なる志を抱く人々に取りては、品性の修養は必要缺く可からざる事
業である。彼等は自覺して居る、未墾の土田には不毛の荆棘のみ叢生するが
如く、又未だ馴養せられざる牛馬は働きに不適當であるが如く、人も亦其の雜
駁なる天性に打任せて置くとときは、其人の備具し得べき個人的品位をも、社會
的勢力をも獲得することが出來ない、故に自ら修養を怠る者は、天に對し人に

對し又己に對しても職責を缺く者であると。

然し修養は果して可能的であるかと問ふ者あらば、余はサンフランソアツ、サルの例の優雅なる言辭を假りて之に答へて曰はふと思ふ。巴旦杏の根を貫きて液汁を出すのみにて、苦き巴旦杏を甘き巴旦杏に變化せしむるを得とすれば何が故に吾人が吾人の邪癖を除去して自ら善良なる者となる能はざる理あらんや。如何に善良なる性質と雖も、悪しき習慣によりて惡化せざるものはなく、如何に偏屈なる性質の人と雖も、先づ第一に天助により、次に勉勵と注意によりて矯正せられざるものはなし。」

然しながら人の性質が如何に屈伸自在になると云つてもそれには制限があるから、生來の傾向を全然改造しやうと思ふのは、大なる謬想である。勿論人は衛生法によつて其の氣質を改良し、之をして意志の命に善く服せしむるやうにすることも出来れば、又絶す道德上の努力を以て或傾癖を消長せしむることも、否、生滅せしむることまでも出来るけれども、然し如何に奮勵しても、

特に年を取つて屈伸の性が減少したならば、遺傳と教育とによつて刻み附けられた印象は永く之を保つて行くであらう。是を以て修養と云つても決して天性改造と云ふほどの話ではない、唯出來得る丈け天性を利導することを目的とするのである。

乃で余は品性の修養を三項に分つて、之を論じやうと思ふ。第一、己の人と爲り如何を知りて、其の矯正すべき妨害物と利用すべき資質とを識得すること、第二、己が一生を律する規格を畫して、之を完全に施行するを畢生の目的とすること、第三、此の修養事業に於て如何なる方法を探つたらば、成功を期することが出来るかを究むること、即ち是である。

(一) 己の人と爲りを知ること

凡そ人は事を行はんとする前に、先づ己の力量如何を知らなければならぬと云ふ事は誰でも心得て居る眞理である。人の心は人工を施すべき材料た

ると同時に其の作業の器械である。言ふまでもなく大理石と粘土、火と木とは自ら其の取扱方を異にして居る。又器械を運用するには、多少修業をせねばならぬ。下手な人の手では精巧の器械を運用することは出来ない。故に吾人の一生を律する法は、吾人の素質に準應するものでなければならぬ。自ら己の人と爲りを知らなければ、己に適當なる法を立てることは出来ない。

然るに世には自知の明なき者比々皆然りてある。己の人となりを知れる人果して何處にか在る。己のことを研究する人果して幾人かある。古賢が賢哲の道に入らんと欲する人に向つて『己れ自らを知れ』と曰つたのは、以ある言である。此言はソクラットの曰つた所のものであるが、此人は實に人の大なる禍は己れ自らを知らざるに在ることを能く知つて居つた賢者である。蓋し己れ自らを知らなければ、修養の望は起さぬ。設令起しても、修養事業を善く利導することは逆も出来ない。

人は常に自分の事を避けたがるから、尙更自己研究の事を語る必要がある。

世の輕佻浮薄なるや彼等を盡感して其の本心を失はしめて居る。彼等は其の羈絆を脱するの氣力が無い。實を言へば自ら反省すると云ふ事は苦しい事である。人は常に目の誘ふ所に欺かれて心外に奪はるゝから、自ら奮勵して努めなければ、注意を自身の上に引返すことが六箇敷い。唯自省の士のみ自己の心に入る道を開くのである。それに又人が己れ自らを友とするを好まぬのは、自己の罪過が故障を申立てるからである。事茲に及ぶと急いで眼を他に轉ずるのが人情である。

斯くの如く人は本來自省の心に乏しい者であるから、勢ひ意志の力を以て自知の學を強行しなければならぬ。而して自知の學は二つの道によつて行はれる。自ら良心を省察する事と友人の忠言に耳を傾くる事即ち是である。良心の省察は品性修養上、必須缺く可からざる道である。是を以て古來道學者及修道士は大に之を奨励したのである。

古來宗教上の修道院の創立者は何れも皆門弟をして克己の道に導かうと

したから、先づ第一に良心省察を重んじて、之を院律の要項としたのである。沈黙は凡ての能力の集中に好適の道であるから、之を行はしむること頗る嚴重にして且つ長時に亘らしめたのである。此時には各自中心の大々の活動を發揮し、己の行爲を注意警戒し、言語を猛省し、心癖につきては其の萌芽をも戒慎しなければならぬことにしてあつた。

此の省心の道を獎勵せんが爲に、各自は其の成績を一々良心の指導者に報告しなければならぬ義務を負はしめてあつた。指導者も亦自分の経験し得た所につき教を垂れ彼の燈臺下暗しと云ふ言もあるから各自の自觀の中に尙漠然たるものがあつたならば、之を正確にしてやつた。若し尙ほ精しく人から聴きたいと思ふときには、會友中、人の外容を見て内心を知るに堪能なる者に尋ねな。其時會友は自分では私見が勝つて認識し得ざる所を其の人の爲めに親切に告知すると云ふ規定であつた。

此の方法は修道院などには最も適當であるが、世間に於ても十分に勇氣が

あつて之を利用しやうと思ふ人があるならば、至極結構であらう。少くも日に三たび吾身を省みると云ふやうな人は、天知る地知るの下に立つて能く己を省察すると同時に、自負の幻影に欺かれぬ爲に、竊に忠友に向つて『人々は吾に就て何と思つて居るか』と問ふが宜しい。

自ら糺明して正直に己の心事を知らんと欲する者は、必ず自知の明を得るやうになる。『尋ねよ、然らば見出すべし』と云ふ吾師の言がある。然り、正直に尋ねる心あらば、確に己の真相を認むることを得るであらう。さすれば己の性質の如何をも己の氣質に就て畏避すべき所若くは希望すべき所をも、己の缺點己の實力をも、又如何なる道に向つて努力奮勵すべきか、如何なる律生法を取るべきかをも知ることが出来るであらう。

(三) 人生を律する規格を定むること

自知より生じ来る最良の利益は、之が爲に己に適當なる律生法を立てること

とを得る事是である。人は各個に自ら導き自ら支ゆる法則を有つて居らなければ、醉生夢死、蠢然として生れ、蠢然として死する者となつて了ふ。然るに此の如く偶然に生を送ると云ふのは所詮罪たるを免れぬ。何となれば人生を無用に歸し、天賦の賜を空しく費すより外、仕様のない我儘であるからである。

之に反して一種の律生的規則を有つて居る者は其の履むべき道を示され、盡すべき義務を望見しつゝ、始終勇氣を勵まされ、絶えず職責に従事して居るから、人の厭怠し易き無爲の生活より救はれるであらう。

此の規則は自己の考から立案しなければならぬ、さうすれば之を守るに尙一層念を入れるやうになる。其上に良心の道に長けたる者に檢閲裁定を乞ふが宜しい、さもなければ寛嚴宜しきを得ざることかあるかも知れぬ。餘り嚴に失すれば己の力に堪へられぬ規則の重荷の爲に身を壓せられ、身を弱められて、却て害になるであらう、又餘り寛に過ぐれば、身を修練する爲にもなら

ず、己の要求に應ずる助けにもならぬであらう。是故に己の規定したる規則は賢明の士に質し、就中己の修養に興味を有つて居る賢明の士に質して之が裁斷を求めねばならぬ。

律生の規則は二個の要件を具備しなければならぬ。日々行ふべき職務の

計畫と矯正すべき惡癖及發達せしむべき良習の表目即ち是である。

職務の計畫は、無論人性の屈伸性に鑑みて立てなければならぬが、毎日意志の一定せざる程悪いことはないから、日々休憩の爲めに費す時間と勤務の爲めに使用する時間との配當を規定しなければならぬ。それで先づ第一に規定すべき點は起床と就寢との時刻である、次に心靈上の修養の時間である、又其次には勤務の時間と適當の休憩時間とである。若し勤務の順序が自分の心次第に決することが出来るならば、急ぎのものと骨の折れるものとを第一にすべきである。『今日行ひ得る所のものは、之を明日に延ばす勿れ』と云ふ金言を以て絶えず意志を鍛へねばならぬ。此の如く規定したる律生の規則

に従ふときは其の品性は鍛錬せられて眞面目なる習慣を馴致し、有害なる悪癖の如きは殆ど考へずして矯正せらるゝに至るのである。昔者修道士が己の許に來りて黙想を以て心を改めんと欲する人に向つて、先づ第一着に處身の細則を確定せしめたのは、尤な次第である。

上述の如く職務の順序を規定したばかりでも、律生の規格は品性に大に資けとなるものであるが、傾癖に對する規定によりては、一層直接の利益を感ずるのである。

先づ己の品性に害になる習癖を摘記することより始めねばならぬ。其中には肉體的のものもある。例へば肉慾、酒癖、饕食等は是れである。或は道德的のものもある。例へば輕薄、移氣、多感、嫉妬、憤怒、傲慢、臆病、利己等即ち是である。次に如何なる習癖が自己の品性を練磨する爲に貢獻するかを調べなければならぬ。例へば正直にして寸毫も枉げざること、常に己に克つこと、決意の堅固なること、社交上親切にして愛嬌あること、舉動の率直にして謹慎なること等即

ち是である。特に己が重なる弱點、之が爲に夥多の重き罪過に陥落すべき主悪を糺斷し、又之れに反對なる美質を探求するやうに務めねばならぬ。

然れども餘り立案ばかり多くして意志の煩勞を來たすが如きことなきやうに注意せねばならぬ。缺點を一つ／＼づゝ糺斷して、古書に曰ふ如く『若し毎年一惡を抜き去らば、頓て完全なる人となるべし』と云ふ通りにするが宜しい。其譯は唯一つの過失を追窮する時でも、心は全然道義的努力の方面に傾注して行く、而して此の傾注力は日々道德の域に進境するばかりでなく、傾注それ自らが既に品性を組織する所の心的状態である。

(三) 道義的努力を支持すること

一生を律する規格を立てるだけでも、既に多とするに足りるが、然し尙一歩進んで困難なる大業を行はねばならぬ。恰も船長が海圖の上に其の目的地と航路とを畫したるときには、決して港灣に惰眠を貪つては居らぬ、機關を運

轉せしめ船夫を悉く使役し、波濤を切つて其船を疾走せしむるが如く、吾人も亦一たび其の辿るべき道を心得た上は、凡ての能力を糾合し、大に之を鼓舞獎勵して全力を傾注しつゝ、修養の大業に従事すべき筈である。此の如き規律的及克己的の道にはいるにも、亦繼續するにも大勇を要することを自覺しなければならぬ。何となれば人は其の資性の疲れ易きにも拘らず、又日々の事業の爲に妨げられて、俗務多端、寸暇なしと云ふやうな場合あるにも拘らず、律生の規則を重んじて之を守つて行かうとするには、絶えず意志の力を盡さなければならぬ。毎日邪癖を矯正して、其より出る一言一行を制し、絶えず良習を馴致發達せしめて、其より出る行爲を積み重ねて行かうとするにも、中々努力を要することである。品性の修養と云ふことは、凡ての道德的生活の如く品性修養は其の一部分である間斷なく時々刻々努力して居ると云ふことに歸するものである。

是に於てか『天國は力を要す、強き者のみ之を奪ふ』と云ふ聖言の轉た眞

なるを覺ゆるのである。此の天國は道德上の氣力ある者の手に歸するもので、是れは嘗に未來の天國をのみ指すのではない、現世の天國をも示すものである所謂『天國は汝の衷に在り』と云ふその天國を指示するのである。之を言ひ換へるならば『勇ましく努力して以て、汝自らの勝利を期せよ、然らば同時に神境に達せん』と云ふ意味である。

努力は之を盡す毎に辛き度を軽減するものである。何となれば意志は練習によつて動き易くなるもので、是れが即ち其の奮勵の報酬である。然しながら如何に道德の最高點に達すると雖、最早努力の要なしと云ふことにはならぬ宛も彼の空飛ぶ鳥の如く、羽ばたきしないやうになると、體は自然の重量によつて地に落ちて了ふ。世には多年辛苦經營した努力の結果を數日の弛廢の爲に失つて了ふ者が幾人あるか分らぬ。是故に人は一生に亘つて、努力して居らねばならぬ。

されば品性修養の大業を修了せんと欲する者は道義的努力の支柱となる

ものを能く識得して、之を實行の上に施さなければならぬ必要がある。然るに此の必要缺く可からざる意力の支柱となるものは、内に在つては心的生活こころのせいこう外に在つては人的獎勵ひとのしょうご即ち是である。

ラコルデルの言に『自ら心に潜むは、世に最も大なる力なり』とある。余は心的生活を讀するに焉よより善き言はないと思ふ。試に往いて潛心の人を視、其の人が義務を盡すに於て如何程道德的權能を發揮して居るかを調べ見るが可い。自己の心に立入りて、内的生活を送ると云ふことは、如何に偉大なる業であるかを必ず確認して歸るであらう。

多くの人々は正當の職業とは云ふものゝ、其の爲に心を奪はれて、絶えず心的生活を送ると云ふことが出来ない。然れども少くとも日に二たび朝と晩に又職業に従事して居る時でも、何か困難な事が起る度毎に自ら心に省みると云ふやうにしたならば大なる利益を收むるであらう。宗教を信奉して居

る人々の如きは規則によつて之を要請されて居る、何となれば朝夕の祈禱と云ふものは、取りも直さず、自省的默想に外ならぬものである。世間の人々に至りては通常或は瑣事に紛れ或は業務に忙殺せられて居るから、毎朝十五分間、一日の終りには少くとも五分間位は自省することを以て缺く可からざる義務とせよと勧めたいと思ふ。

此の僅少なる自省時間によりて道德上の氣力を興起せしめんが爲には、高尚なる觀念と雄大なる感情とを心に煥起せしめ、凱旋的飛躍を意志に鼓吹せしめねばならぬ。

然るに如何なる觀念を起すべきかと一例を舉げて示さば、大要左の如くである。『生命は天が吾手に托したる至寶である。天の賜を空費すると云ふのは恥づ可きことで、取返しとりかへの附かぬ禍である。吾人は常に閑居不善をなして徒らに之を費してならぬ而已ならず、之を天に獻げ、社會に獻げ、我自らの爲にも獻げて、大に貢獻する所あらしめねばならぬ。然るに吾れ若し吾時間を徒

費し、邪癖に流れ、又心靈上の危険を避けんことを務めぬならば、吾永遠の救拯をも危うくし、吾現在の生存をも空しくして了ふ。吾にして若し奮勵努力しなければ、吾は無用の民である、寄生蟲である。之に反して若し吾生をして善美ならしめ貢獻する所あらしむるならば、我は實に勇健の士となるであらう云々』と。斯る折には必ず高想大志が心の裡に湧起して、テレーズと云ふ才媛の語りたるが如く、設令悉く之を實現すること出来なくても、決して無用のものとはならぬ。何となれば勇ましく羽ばたきをするやうなもので、少くも其時だけは超然として塵土の表に出るのである。

精神の確信は人を鼓舞する動機であるから、其時意志は活躍して現在の義務を遂行するのである。然し内心の働きを反復して徐々と決心の水準を一段づゝ高めながら之を奮起せしむるのは尙更に善い。オレ、ラブルヌは此の内心的勸誘を非常に重んじて、世の青年子弟に毎朝暫時の間斯く獨語せんことを勧めたのである『然り、我れ志望す、我れ志望す』と。然して障害物に

接して少しく躊躇逡巡せざるほど其の意志を支配し得たと自覺するに至るまで、此の如く獨語せしめたのである。是れは又毎日此の如く反復しなければならぬ、何となれば人は毎日過失に陥りて己の弱點を回想せしめられるからである。凡そ人の過失の中に最も悪いものは失望である。サンフランソア、ザルの曰ふには『己の失墜に驚かず、寧ろ己の弱質を知らしめられたるを天に謝して謙抑し、過ちあらば改むるに憚ること勿れ。何となれば微者の微者たり、弱者の弱者たり、淺ましき者の淺ましき者たるは、毫も嘆稱すべきことにはあらざればなり。』

心的生活に於て此の如く自ら鍛鍊するに至るまでには、最早一種の道德上の氣力を或程度まで具して居らねばならぬ。即ち他人の助を須たず自ら足るだけの資格を備へて居らねばならぬ。然るに此の如き人は天下に幾人あらうか。善に向つて飛躍を更新して、自家心田の土に接觸するまでに至る人

すら皆無の姿ではあるまいか。善き志望の火炎を煽り起さん爲には、外部より火氣の助を藉る必要あると云ふのが、滔々たる天下の人々の常情ではあるまいか。其の火氣は何處から出て来るかと云へば、人々と書物とから出て来ると謂はねばならぬ。

厭世主義の盛なる時代に『遵主聖範』と題する書の著者の曰ふには『吾れ出で、人々に交はる毎に、人物の資格を缺損して歸りぬ』と。成程交つて害になる人々があるには相違なく、而もそれが多數を占めて居るには相違ないが、然し交つて益になる人々もあることを記憶しなければならぬ。試に考へて見るが可い、心が鬱憂に沈んで人生は不可解と思はれて、意氣銷沈と云ふやうな悲しい日に當りて、天の不可思議なる運命に導かれて、親切溢るゝばかりの人の許に到るとしたならば、其の露々たる温容に接するすら早や既に心中の鬱結が解けて胸裡に平安の回復せられた心持がする。況して其人が愈愈口を開くに至つたならば、其言は直に明教となり、その人自らが奮勵するを

見るときは其の活氣は直に傳つて我意志を活動せしむるものとなり、それが爲め今迄失望的人間であつた者が義務と克己獻身の精神を帯び、勇氣凜然として還るやうになるであらう。實に人の心は發して外に傳るべきものであつて、其人邪惡陋劣なれば、他の人を汚し、神聖にして且つ義勇なれば、他の人生を活動せしめ、向上せしむるものである。是を以て初めて友を擇ぶときに、成る可く己が一種の指導者となり得べき益友を求めねばならぬ。然る時は煩悶すれば、往て明教を受け不安なれば、就て勇氣を求め、衰弱すれば、頼る可き杖を得意氣銷沈すれば、活潑なる鼓舞獎勵に接することを得るであらう。故に古經に『友を千人の中に擇べ』と記してあるを、サンフランソア、ヅ、サルは附記して曰ふには『吾は之を一萬人の中より擇ぶべしと言はん』と。成程友によりては我が良心の指導者となることがあり、又多くは信任すべき者又親密にすべき者となるから、誰でも心安く、氣遣なく、之に交り、其人に同情を寄せ、て其人から十分に保護してもらふが宜しい。

然し友人の許に到るのに遊惰緩漫にして、志望と活動とを忘れて行つてはならぬ、熱誠を携へて、唯我弱點を支へて貰ひ、我心の熱度を高めて貰ふ積で行かなければならぬ。我は別に友人の權勢に併呑せられ、其の影響で窒息せしめらるゝを望む譯でない、唯我を束縛して虜となす所の羈絆を脱却せん爲に其の援助を請ふだけのことである。一言以て之を蔽へば、我が友人に往くは獄吏を求むるが爲ではない、救濟者を求むる爲である。

益友の價値は評價することの出来ぬ程であるが、但だ益友は天下稀有の珍寶で中々容易に求められないから、書物を以て之を補はねばならぬ必要がある。成程書物は生命を傳ふる温き情を有つて居らぬが、然し言句の死灰の下には、活氣を帯びて讀者を暖むるに足る遺靈が存して居るから、之を追求する者は之に接することが出来る。然るに人の選定すべき書を求むれば、二書ある一は學術書にして、他は道德書である。前者に就ては知識を磨くべく、後者に就ては人生を照らし、意志を鍛鍊して貰ふべきものである。吾人は少くと

も後者一本を座右に置き朝に晩に之を讀みて、其の意見を叩き、其の忠言を聴き宛も忠實なる友の如くに思ふべきである。日々此の如き益書を讀むことを怠らぬ人は決して意氣銷沈するの憂はない。

結 論

若も讀者にして本書の卷を掩ふて、心性を修練し、品性を養成することを心に懸けるやうにならないならば、著者の希望は全く外れたと云はねばならぬ。抑々人は萬物の靈長であつて、決して土塊の如く遺棄することの出来ぬ價値を備へて居る。其の歸着すべき命數は高崇であつて、之を實現することを務めずには居られぬものである。

人生の意義は深且つ大なれば、之を偶然に打任せて置くべき筈のものではない。何となれば人生の道に外れたものは、取返しのかぬ禍である。各個人に取つても禍であれば、社會に取つても禍である。何となれば個人は之が

爲に現在にも將來にも必ず苦むであらうし、社會は之が爲に貢獻すべき成員を喪ひ却て厄介になる人間を認めるからである。

然るに人生を作るものは品性である。品性がなければ取るに足らぬ人生となつて了ふ。人生は品性に應じて發達もし、効果をも結ぶものである。

然し品性は生れながらにして與へられるものではない、必ず修養を要するものである。生れながらの人は善草惡草(善惡の傾癖)の共に發生して居る野田の如きものである。修的即ち耕作によつて惡草を刈取り、善草を助長せしむべきものである。

此の傾癖選擇の重要な事業は之を誰の責任に歸したら可からうか。是れ蓋し熱誠なる教育家が畢生の心血を傾注する所である。然し良教育家なる者は世に稀にして、且其の効果が多數の人に傳はらざるのみならず、深く其心の奥底にまで徹すること難くして、單に之を啓導し、之を獎勵するのみに過ぎないから、各人の自修を免除するものではない。

畢竟するに品性修養の事業は各自の肩上に懸つて居る。之を志す者は自ら茲に成功すべき筈であつて、之を放棄して置く者は、他の人が之を補ふこと出來ぬのである。

本書は乃ち聊か有志の者の爲に之を書き綴つたのである。

有志の士は本書に就て主として左の二事を學び得るであらう。

第一、人は何人と雖自分の氣質に就て嘆くべきではない。各自之を研究して以て其の強弱を知り、其の長所美點を取つて、出來得る丈け之を發展せしめねばならぬ。己が所有に就て徒らに嘆くも何の役にも立たぬ。寧ろ其の持つて居る機關を利用すること賢き道である。

第二、人の性質は如何であつても、其の人の手に在るときは、宛も捏ね易い粘土が陶匠の手に在るが如くである。多年辛抱して、苦心經營するならば、遂には理想的品性を畫くことが出来るのである。所謂理想的品性とは、潔直犯す可からざる良心、羈絆を脱せる勇健なる意志、同情に富める仁慈なる心威儀儼

然たる外容即ち是である。

エドガール、キリーの言に『人各々フェイスアスたり。各人皆一種の彫刻師なり。其が大理石若くは坭土を矯正し渾沌たる土塊をして、智あり義あり自由ある一介の人物を現出せしむべき者なり』と。

天境の榮位に列せんと欲する者は皆此の修養的事業に従事すべきものである。『何となれば天上の社會は活ける石を以て築かれ、其石は光榮の位地に置かるゝ前に先づ石工の手によつて切瑳琢磨せられねばならぬからである。』

品性論畢

明治四十一年六月九日印刷
明治四十一年七月十二日發行

定價金參拾八錢

譯者 前田長太

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 市川七作
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

品性論與附

著作
所有

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

全國教育者大集會編纂

帝國六大教育家

附名家談叢

全一冊
洋裝大判並製
紙數二百八拾頁
正價金五拾錢
郵稅金八錢

寫真版

故文部大臣正二位勳一等伯爵大木喬任君
故慶應義塾創立者 福澤諭吉君
故同志社創立者 新島襄君

新次君

▲六大教育家追頌演說

▲故伯爵大木喬任君に就て

文部次官 澤柳政太郎君

▲故子爵森有禮君に就て

法學博士 木場貞長君

▲故文學博士中村正直君に就て

文學博士 三宅雄次郎君

▲故文學博士中村正直君の頌辭

東京高等師範學校教授 澁谷啓藏君

▲故福澤諭吉君に就て

慶應義塾大學教授 林毅陸君

▲故新島襄君に就て

衆議院議員 橫井時雄君

▲故近藤眞琴君に就て

從五位 色川園士君

▲全國教育家大集會演說

▲理科振興の要

▲奉天の大會戰

▲教育者の教育

▲日露戰後の教育

▲祝詞

▲訓示演說

▲國民教育の意義

▲日本海の大海戰

▲師範教育を論ず

▲商業大學設置に就て

東京高等工業學校校長 手島精一君

陸軍砲兵少佐 小野寺重太郎君

農學博士 新渡戸稻造君

法學博士 大隈重信君

東京市長 尾崎行雄君

文部大臣 牧野伸顯君

衆議院議員 島田三郎君

海軍中佐 秋山眞之君

東京高等師範學校校長 嘉納治五郎君

東京高等師範學校校長 嘉納治五郎君

東京高等師範學校校長 嘉納治五郎君

東京 本町 博文館 元兌發

次目書本

帝國教育會 長 辻新次君序文
陸軍教授 兼 矢津昌永君
東京高等師範學校教授 山崎直方君
東京高等師範學校教授 文部省 參事 官 牧瀨五一郎君

女子高等師範學校教授 町田則文君
東京美術學校校長 正木直彦君
陸軍教授 兼 牧瀨五一郎君 纂編

帝國教育會編 世界現勢地圖

精巧銅刻美麗着色ニス引懸圖折圖調製赤道比例尺二千五百萬分一縱三尺五寸橫四尺七寸
定價 金六圓 送料實費
價 金五圓 小包料金拾六錢

我大日本帝國

中心

中心 每一時間ノ時間ヲ揭

附錄
山高、海深、
大河、延長、
流域、面積、
列國面積人
口比較、列
國貿易額比
較、列國軍
備比較、韓
國南滿洲精

本圖ハ東經百三十五度ヲ以テ全幅ノ中心トセリ故ニ本邦ト各地トノ時差ヲ知ルニ便ナラシメ郵船航路、海底電線及ビ鐵道線路ヲ詳細ニ記入シ特ニ本邦汽船ノ外國定期航路ニハ旭旗アル汽船ヲ適宜ニ配置シ我が大使館、公使館、領事館ノ所在地ニハ特ニ視目ヲ惹クベク用意シ韓及滿洲ノ精圖ハ附録トシ又各國ノ面積、人口、軍備、貿易額等ヲモ圖式的ニ掲グ又陸上ノ山脈河流等ハ極メテ精細ニ之ヲ描キ又海面ニハ主要ナル海流、風向、風域、流氷ノ限界等ヲモ網羅セリ一幅披覽ノ下現世界ノ光景ハ瞭々トシテ掌ヲ指スカ如シ尙ホ本圖註記ノ文字ハ日、清、韓ノ地名ニ就キテハ漢字ヲ用ヒ蒙古、滿洲等ハ漢字ノ下ニ羅馬字ヲ添ヘ西洋地名モ倫敦伯林ノ如キ主要ナルモノハ羅馬字ニ添フルニ漢字ヲ以テシアルバ清國、韓國人士ノ閱覽ニモ便益少ナカラザルベシ世ノ政治家教育家、實業家其他一般ノ人士此好紀念ノ大地圖ヲ所有シテ世界の智識ヲ修養シ以テ本圖編纂ノ目的ヲ達セシメラレトナセ

東京 本町 博文館 元兌發

